

例 言

1. 本書は、株式会社綾部製作所による工場建設に伴う倉賀野中里前遺跡2(矢中40遺跡)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高崎市教育委員会指導のもと、事業者から委託を受けた山下工業株式会社(代表取締役 山下尚)が実施し、その費用については事業者が全額負担した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県高崎市倉賀野町字中里前4728-1 高崎市遺跡調査番号 646(矢中40遺跡) 調査面積 624.6m²
期 間 【現地調査】平成27年8月6日～同年8月24日 【整理】平成27年8月25日～同年10月30日
調査担当者 永井智教(山下工業株式会社 文化財事業部 調査技術員)
調査監督員 矢島 浩(高崎市教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財担当主査)
4. 整理作業及び本書作成は永井を中心とした谷藤龍太郎・大島郁美(山下工業株式会社)が行い、山際哲章の協力を得た。
5. 遺構図作成はタナカ設計(田中隆明)、自然科学分析はパリノサーヴェイ株式会社(千葉博俊)である。
6. 本書の執筆・編集は永井が行い、高崎市教育委員会文化財保護課の校閲を受けた。
7. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。(五十音順・敬称略)

高崎市都市整備部都市計画課
青木利文 出浦崇 井田安彦 大野義人 小根澤雪絵 澤田福宏 関口功一 角田真也 中村岳彦 横澤真一

凡 例

1. 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標IX系(世界測地系)の座標値、挿図中の北は座標北である。
2. 挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。

【溝跡】・・SD 【柱穴】・・P 【池状遺構】・・SX
3. 遺構図は1/40 1/150等を適宜使い分け、図中に明記した。遺物実測図は全て1/3である。
4. 本報告書で用いる座標値は、全て世界測地系測地成果2011である。

目 次

例 言

凡 例

I 調査に至る経緯と調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の経過	
II 遺跡をとりまく環境	3
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
III 検出された遺構と遺物	7
1. 調査区概観	
2. 第1面の遺構	
3. 第2面の遺構	
4. 出土遺物	
IV 総括	
一条里水田遺跡としての倉賀野中里前遺跡2	11

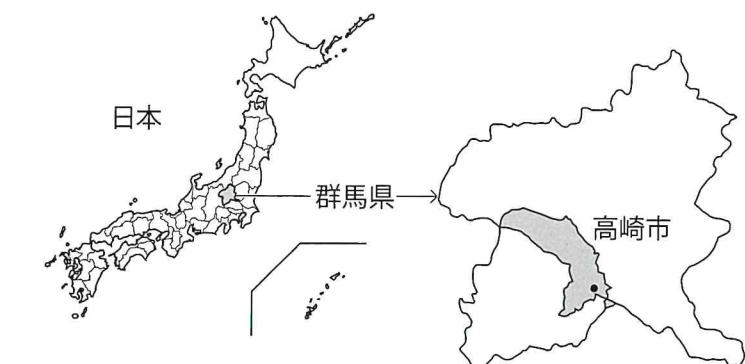


Fig.1 遺跡の位置

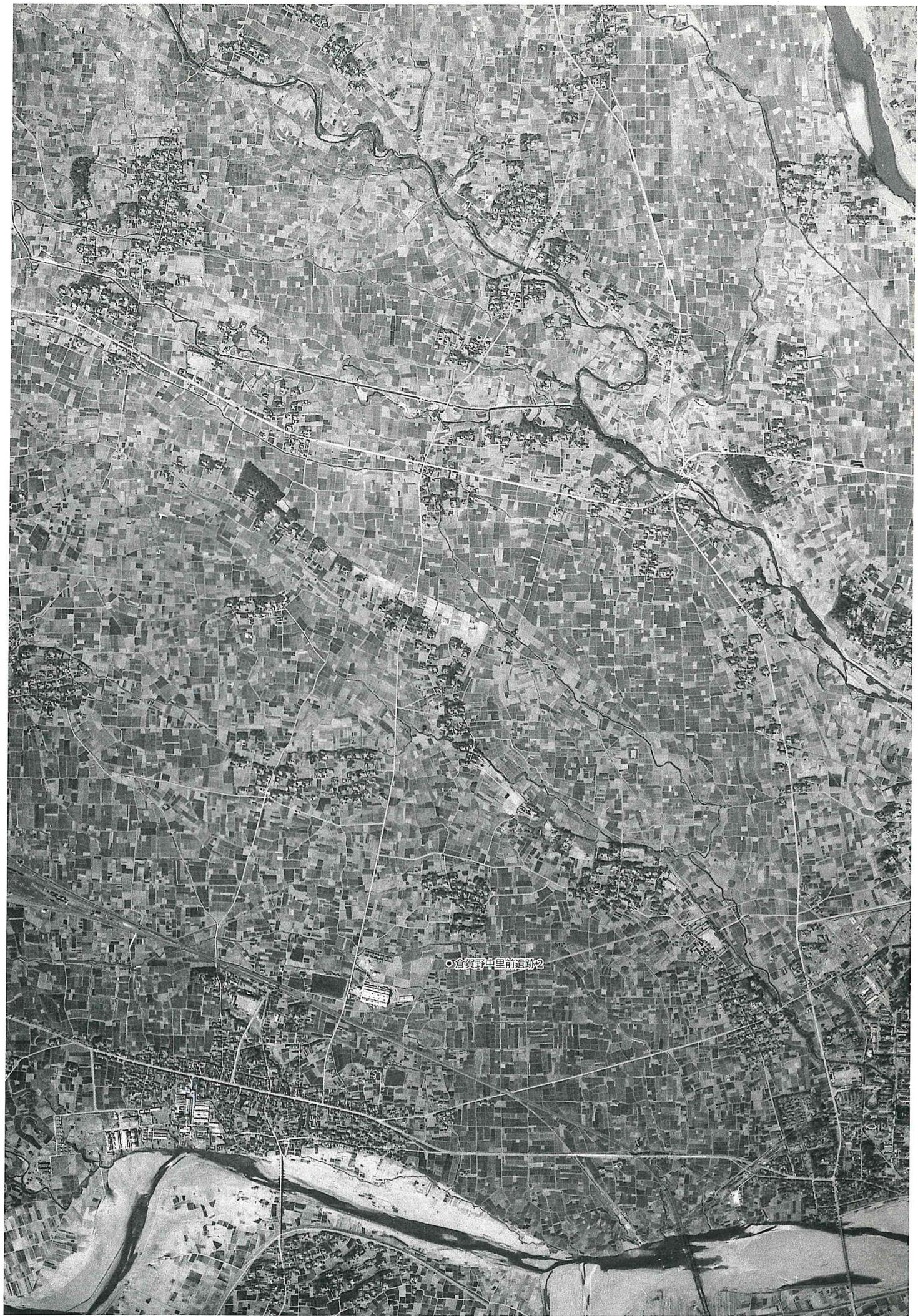


Fig.2 遺跡地周辺航空写真（昭和 23 年 4 月、米極東空軍撮影、約 1/20,000）

I 調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

平成27年5月、株式会社綾部製作所から、高崎市倉賀野町において計画している工場建設に先立つ埋蔵文化財の照会が高崎市教育委員会文化財保護課（以下、市教委）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である倉賀野中里前遺跡内に該当し、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。

開発計画が具体化した同年5月18日には、市教委へ確認調査依頼書と文化財保護法に基づく届出が提出され、同年6月16日に確認調査を実施した。その結果、平安時代末の浅間山噴火に伴う火山灰の堆積層に覆われた水田遺構を検出、埋蔵文化財の所在が明らかとなった。この結果をもとに開発者

と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡は既に同一遺跡が平成7年に調査・報告されており、これと区別するために「倉賀野中里前遺跡2」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に準じ、平成27年7月24日に株式会社綾部製作所と民間調査機関の山下工業株式会社との間で契約を締結、7月30日には株式会社綾部製作所・山下工業株式会社・市教委での三者協定も締結、調査にあたっては市教委が指導・監督することとなった。

2. 調査経過

調査は新設工場の建物敷全域を対象とし、排土置場と現場事務所については調査区外の場内とした。表土除去には 0.25 m^3 級バックホウと 0.45 m^3 級バックホウ各1台を用い、遺構測量はトータルステーションと手実測を適宜使い分けた。写真撮影はアナログカメラ（35mmモノクロネガ・カラーポジ）とデジタルカメラを併用している。

現地調査は平成27年8月6日～同年同月24日までの実働13日で、表土除去と共に作業員を投入して隨時遺構確認を行った。検出状況の記録後、平面図や遺物の取り上げを並行しながら各遺構の調査を行い、8月12日には高所作業車を用

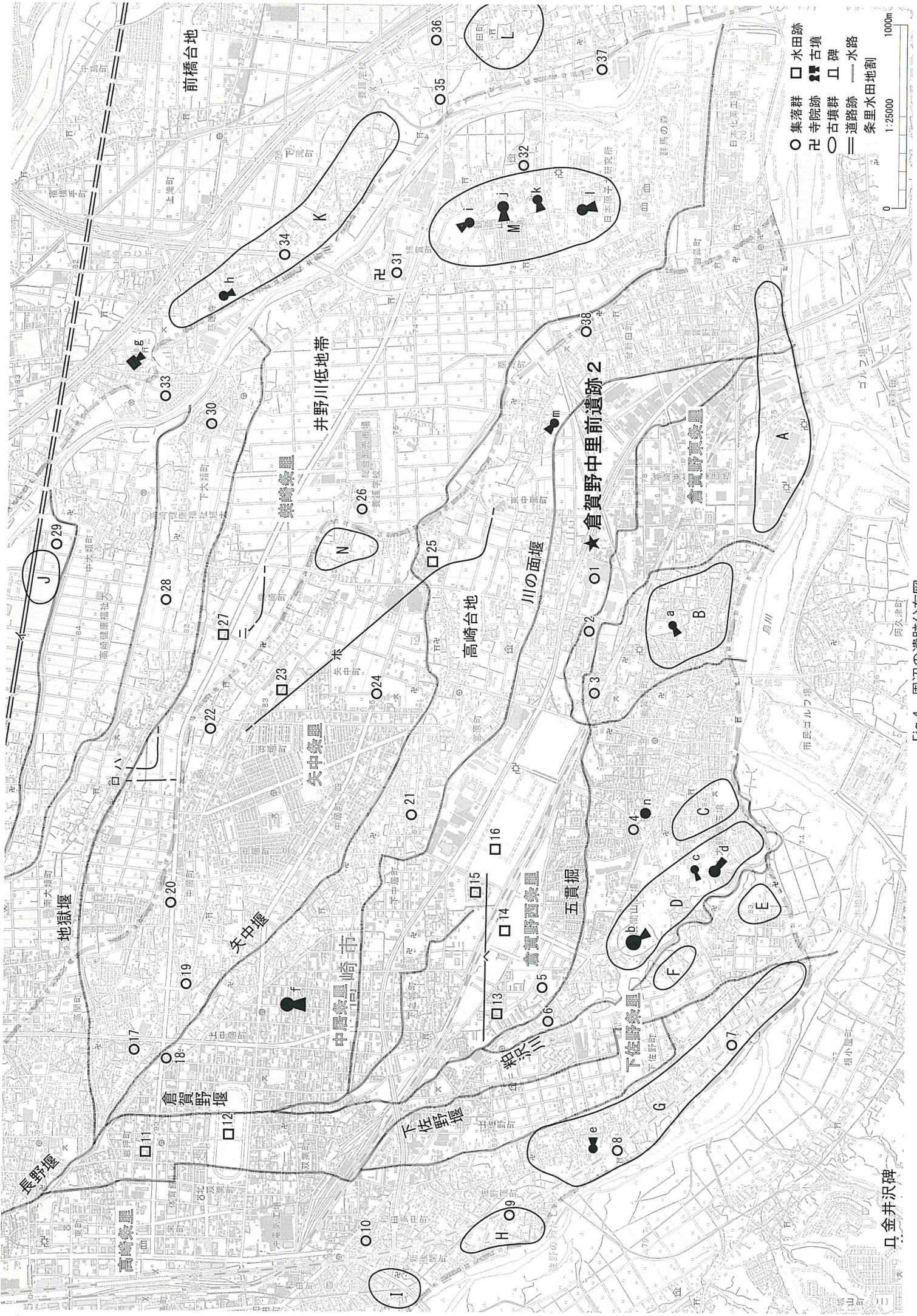
いた写真撮影、盆休み明けの8月17日には市教委担当者による完了確認を受けた。翌日にはバックホウ1台を投入して古代末の水田耕作土を除去したところ、その下から溝跡数条を確認、そのまま第2面として調査を行い、8月24日に再びの完了確認を受けた。思えば調査の前半は晴天続きで順調だったが、後半は雨と湧水の排水作業で、苦戦の日々であった。

整理作業は現地作業の終了と共に開始し、遺物の水洗・注記・接合・復元・実測・トレースと遺構図面の調整を済ませた後、原稿執筆とレイアウトを行い、平成27年11月13日には本書の刊行となった。



Fig.3 調査区とその周辺

Fig.4 周辺の遺跡分布図



II 遺跡をとりまく環境

1. 地理的環境

倉賀野中里前遺跡は、群馬県高崎市倉賀野町にあり、地形的には榛名山南東麓の相馬ヶ原扇状地から続く前橋台地の南東端に相当する。この前橋台地は更新世後期の浅間山火山の山体崩壊に伴う前橋泥流を基層としており、台地中央を流れる井野川によって二分され、井野川以南の烏川との間は特に高崎台地と呼ばれている。高崎台地や井野川の開析した谷底低地である井野川低地帯には高崎泥流がさらに覆っている。

高崎台地の上面は西北西から東南東へ緩く傾斜し、小河川や一時的な出水によって形成されたと思われる自然堤防と後背湿地が錯綜しているが、全体として比較的水に乏しい地域であったようである。開発の進行する以前には普遍的であった田園風景も、基本的には烏川水系から取水した長野堰と言われる用水路の恩恵に他ならず、それ以前と以降では特に地下水位が大きく変化したであろう点は注意を要する。

2. 歴史的環境

倉賀野中里前遺跡の位置する高崎市南東部は、昭和50年代以降の市街化や土地改良事業によって大半は姿を消したとは言え、一町方格の整然とした水田が連綿と連なる、いわゆる条里地割の水田が特徴的な地域であった(Fig. 2参照)。こうした水田区画は、開発に先駆けて行われた発掘調査により、遅くとも平安時代末には形成されていたことが判明している。今回の調査成果も、こうした広大な条里水田遺跡の一画と位置づけられるものであった。したがって本節では、条里水田が広域にわたって形成されたと目される奈良・平安時代を中心的に周辺遺跡を瞥見し、本遺跡理解の一助としておきたい。ひとまず、条里以前の地域様相を端的に示すものとして、主要古墳の様相を整理しておきたい。

高崎台地の古墳 本地域には古墳時代前期以来かなりの数の古墳・遺跡が濃密に分布し、重厚な研究史が蓄積されている。本来なら前操作業としてそれらを総覧しておきたいが、紙面の都合もあるので、ここでは新編高崎市史を許に、大規模な前方後円墳や代表的な古墳群を時系列に取り上げる。

前期の古墳 前方後方墳の元島名将軍塚古墳(g)、地図外だが玉村町下郷天神塚古墳(前方後円・80m)がある。共に前橋台地上の井野川低地帯寄りに位置しており、元島名将軍塚→下郷天神塚の順と考えられ、形態が方から円へ変わる。前橋台地北縁の前橋市八幡山古墳(前方後方・130m)と、その至近にある三角縁神獣鏡を出土した前橋天神山古墳(前方後円・126m)の関係も方から円への変化で、同様の現象は東毛太田地域にもあり、群馬県域では一般的な事象とされる。

一方で高崎台地上には、今のところ該期の大形古墳は知られていないが、井野川低地帯に臨む台地北縁の(仮)柴崎古墳群(N)中にある柴崎蟹沢古墳が注目される。径30m程度の円墳(方墳との説もあり)と云われ、正式な発掘調査を経た訳ではないが三角縁神獣鏡2面を含む4面の銅鏡を出土している。先の方形から円形への変化(=東海から畿内)を踏まえれば、本古墳が円墳であるか否かは重要であろう。

中期前半の古墳 浅間山古墳(b)と隣接する大鶴巻古墳(d)がある。これらは倉賀野古墳群を構成する大形の前方後円墳だが、その前後関係も含め未調査で内容は今一つ不明である。とはいえた前方後円という形態、浅間山の約170mという卓越した墳丘規模からみて、より広大な地域を治めた王の奥津城に相応しい。なお、浅間山は大和盆地北部の大王陵と相似形であることが既に指摘されており、畿内王権と強い関わりをもった人物像が予想される。倉賀野古墳群周辺には、ほかに東方の(仮)倉賀野万福寺古墳群(C)や西方の古墳群(E・F)、さらに東方の下佐野古墳群(G)に大小の円墳がある。また、未調査で実態不明だが綿貫古墳群(M)中の77mの前方後円墳である普賢寺裏古墳(j)も該期とされている。

中期中葉の古墳 倉賀野古墳群北方の大形前方後円墳である越後塚古墳(f)がその可能性が高い。越後塚は早くに削平され市街化した為、出土品や正確な形状・規模は切不明であるが、航空写真や地籍図からは全長約130m、南北主軸という点、前方部が比較的大きい墳丘形態から太田天神山古墳に続く段階と推定され、確認調査が望まれる古墳である。

Tab.1 周辺遺跡一覧

古代集落遺跡・寺院址・水田跡	19	上中居辻薬師 / 古墳後期集落	38	綿貫台新田 / 古墳後期・平安集落	c	小鶴巻 / 前方後方 中期
1 倉賀野中里前 / 古墳・平安集落	20	上中居遺跡群 / 古墳~平安集落		古墳群	d	浅間山 / 前方後円 前期末
2 倉賀野辻薬師 / 奈良集落・平安烟	21	下中居条里 / 古墳後期~平安集落・水田	A	倉賀野東 / 後期	e	漆山 / 前方後方 後期
3 倉賀野上植越 / 平安集落・官衙?・水田	22	西浦吹手西 / 平安集落	B	古墳群 / 後期	f	越後塚 / 前方後円 中期
4 倉賀野上稻荷 / 平安集落・水田	23	矢中天王前 / 平安水田・大溝	C	倉賀野万福寺 / 前期末~後期初頭	g	元島名將軍塚 / 前方後方 前期
5 下之城村前 / 古墳未集落・平安水田	24	矢中村北 / 奈良集落・平安水田・大溝	D	倉賀野 / 前期末~後期初頭	h	前山 / 前方後円 後期
6 倉賀野西上正六 / 古墳後期集落・掘立・塀	25	矢中村東 / 平安水田・大溝	E	古墳群 / 前期~中期	i	綿貫親音山 / 前方後円 後期
7 下佐野II / 平安集落	26	柴崎熊野前 / 平安集落	F	古墳群 / 中期	j	普賢寺裏山 / 前方後円 墳中期
8 下佐野I / 平安集落	27	柴崎遺跡群 / 平安水田・大溝	G	下佐野 / 前期~後期	k	不動山 / 前方後円 中期
9 船橋 / 奈良平安集落	28	南大類遺跡群 / 平安集落・水田	H	船橋 / 後期	l	岩鼻二子山 / 前方後円 墳 中期
10 新後閑 / 奈良平安集落	29	高崎情報団地 / 古墳後期集落	I	古墳群 / 中期~後期	m	飯玉山 / 前方後円 後期
11 岩押町 / 平安水田	30	下大類柴崎 / 古墳後期集落	J	高崎情報団地 / 後期	n	安楽寺 / 円 終末期
12 高崎競馬場 / 平安水田	31	綿貫遺跡群 / 古墳後期~平安集落・寺院	K	下滝 / 後期		水路跡・道路跡
13 下之城仲沖 / 平安水田・古代大溝	32	不動山東 / 平安集落	L	古墳群 / 後期	イ	東山道駅路(矢の原・牛堀ルート)
14 下之城村前 / 平安水田	33	元島名下川原 / 古墳後期集落	M	綿貫 / 中期~後期	ロ	大溝 / 平安
15 下之城村前(調査会) / 平安水田	34	下滝天水 / 平安集落	N	柴崎 / 前期	ハ	大溝 / 平安
16 宮原町 / 平安水田	35	下滝高井前 / 平安集落		主要古墳	ニ	大溝 / 平安
17 高閔村前 / 古墳後期集落	36	下齊田重土薬師 / 平安集落	a	長賀寺山 / 前方後円 後期	ホ	矢中大溝 / 平安
18 上中居平塚 / 古墳~古代大溝	37	八幡原灰塚II / 平安集落・水田	b	大鶴巻 / 前方後方 中期初	ヘ	下之城大溝 / 平安

中期後半～後期前半の古墳 倉賀野古墳群中の 87 m の前方後円墳である小鶴巻古墳 (c)、井野川右岸に岩鼻古墳群を形成する全長 100m 前後の前方後円墳である岩鼻二子山古墳 (l)・不動山古墳 (k)、他に同形・同規模の古墳として、地図外だが並木稲荷山、井出二子山・保渡田八幡塚・保渡田薬師塚古墳がある。これら古墳は井野川流域という単位で地域把握されるが、若狭徹の検討では浅間山型と太田天神山型の 2 系統が明らかとされており (若狭 1995)、該期の社会構造を垣間見ることができる。初期群集墳と言われる、小円墳で形成される古墳群も特徴的である。高崎情報団地 (J)・新後閑 (I)・船橋古墳群 (H)・(仮) 倉賀野万福寺古墳群 (c) 等があり、短期間で終わるものと、後期後半へ続くものがある。

後期中葉～後半の古墳 倉賀野長賀寺山古墳 (a)・漆山古墳 (e)・綿貫観音山古墳 (i)・前山古墳 (h) 等の中規模の前方後円墳があり、既存の古墳群内に成立する綿貫観音山 (綿貫古墳群) や漆山 (佐野古墳群)、新たな古墳群の先駆け的に成立する長賀寺山や前山という 2 パターンがある。他に小規模な前方後円墳として本遺跡に近い飯玉山古墳 (m) や、倉賀野東古墳群 (A) や下佐野古墳群中の小規模前方後円墳、あるいは下滝古墳群 (K) や下佐野古墳群中の大形円墳があり、複雑に階層分化された小地域圈が林立する社会を想像できると共に、其々の生産基盤となる対応地域への開発の深化を窺わせる。該期の特色として、大規模な群集墳の存在も見逃せない。下佐野古墳群や倉賀野東古墳群は、中小の前方後円墳を含む 100 基を超える後期中葉以降の大規模群集墳で、屯倉の近傍に大規模群集墳が存在するという原島礼二の指摘 (原島 1961 等) を汲めば、倉賀野・佐野周辺が故地とされる山ノ上碑の碑文に見える「佐野三家」を考える上で興味深い。この時期の古墳としては、横口式石槨をもち単独墳的な安楽寺古墳 (n) が注目される。石槨の構造を詳細に検討した訳ではないが、東日本では稀な存在で、畿内地域との関係を考える必要がある。「佐野三家」の存在がその背景にあるのかも知れない。

古墳時代後期の集落 高崎台地東部や井野川低地帯、前橋台地には、錯綜する旧流路に沿って形成された自然堤防上には、図示こそしていないが古墳時代前期の中小の集落が、ほぼ普遍的と言えるほどに分布している。こうした集落は概ね古墳後期前葉には台地縁辺や大きな自然堤防上へ移動する傾向にあるが、これは前期に形成された小さな単位が、中期に集約される過程で耕地と居住域の分離が進んだ結果と思われ、古墳で言えば越後塚古墳の段階と思われる。具体的には倉賀野中里前遺跡 (1) や倉賀野西上正六遺跡 (5)・下佐野 I 遺跡 (8)・下佐野 II 遺跡 (7)・船橋遺跡 (9)・高閑村前遺跡 (17)・上中居辻薬師遺跡 (19)・下中居条里遺跡群 (21)・高崎情報団地遺跡 (29)・下大類蟹沢遺跡 (30)・綿貫遺跡群 (31)・元島名下河原遺跡 (33)・下滝天水遺跡 (34)・下滝高井前遺跡 (35)・綿貫台新田遺跡 (38) である。中でも倉賀野西上正六遺跡では、狭い調査区ながら 6 世紀末～7 世紀前半の掘立柱建物 4 棟とそれを囲むような柵列や区画溝が複数確認されており、報告者は「佐野三家」との関係を指摘している (小林 2010)。興味深い成果であると共に、今後周辺地域における調査の進展が期待される。ほかに台地内に位置する上中居辻薬師遺跡周

辺では、北西から南東へ流れる水路跡が複数確認されている。灌漑用と推察され、水田遺跡が不明な当地域では重要である。

奈良・平安時代の集落遺跡など 本来ならば全ての遺跡における時期別遺構数等の具体的な数値を示すべきだが、ここでは紙面の都合もあるので大きく奈良・平安の大きく 2 時期に分けて概観し、特徴的な遺跡について詳述する。

奈良期の集落 倉賀野中里前遺跡 (1) やその西に続く倉賀野辻薬師遺跡 (2) で、7 世紀後半～8 世紀前半の竪穴建物が確認されているが密度は低く、現段階では平安期への継続は認められない。下之城村前遺跡 (5) でも 7 世紀後半の竪穴建物が確認されているが、これについては西方至近にある倉賀野西上正六遺跡 (5) の古墳後期集落から続くものと思われる。下佐野 I 遺跡 (8) の 7 世紀後半の竪穴建物についても、同一遺跡内の古墳後期集落からの継続である。矢中村北遺跡 (24) や綿貫遺跡群 (31)、対岸の下滝天水遺跡 (34)・下滝高井前遺跡 (35) は古墳後期から継続的な集落で、平安期へと継続する。以上の遺跡は全て律令的要素に乏しく、奈良時代においては一般的な集落として理解される。律令的 (=官衙的) 要素が少ない点は、本地域を考える上で興味深い。

道路 集落以外だと、高崎情報団地遺跡 (29) で確認された幅員 12 m の直線道路が注目される。律令制下の東山道駅路に相当するものとされ、牛堀・矢ノ原ルートと称される直線道路である (イ)。集落分布の希薄な地帯を通過する点は興味深い。道路そのものは奈良期末には廃絶しており、駅路は下新田ルートを経て国府ルートへと移動するとされる。その背景には上野国府の整備や、後述する条里水田の広域施工も要因の一つであったと思われる。

平安期の集落 本遺跡西方の倉賀野上樋越遺跡 (3) や倉賀野中里前遺跡 (1)、南西にやや離れた倉賀野上稻荷遺跡 (4) のほか、下佐野 I・II 遺跡 (8・7)・下中居条里遺跡群 (21)・西浦吹手西遺跡 (22)・南大類遺跡群 (28)・綿貫遺跡群 (31)・不動山東 (32)・下滝天水遺跡 (34)・下滝高井前遺跡 (35)・下齊田重土薬師遺跡 (36)・八幡原灰塚 II 遺跡 (37)・綿貫台新田遺跡 (38) がある。倉賀野上樋越遺跡では、平安期後半の区画溝に囲まれて並ぶ総柱の掘立柱建物や、奈良三彩・綠釉・灰釉といった陶器が出土しており、一見すると官衙的で注目される (IV 章で詳述)。また、倉賀野上樋越遺跡では奈良期から継続する集落もあり、東の倉賀野辻薬師遺跡 (2) と一体をなすものと推定されよう。下佐野 I・II 遺跡は奈良期の低迷後に多くの竪穴建物が出現する集落で、烏川対岸の金井沢碑 (715 年建立) 碑文に見える「上野国下賛郷高田里」に比定されている。高崎台地東縁の綿貫台新田遺跡では集落から円面硯、下中居条里遺跡では墨書き土器を出す竪穴建物と微高地沿いの溝が確認されている。ほかに綿貫遺跡群では、竪穴建物以外に「土壇状遺構」が検出されており、まとまった量の瓦の出土から「綿貫廃寺」とも言われているが、新田郡入谷遺跡の事例からは倉の可能性もあり、遺跡の性格の根幹に関わる問題となる。ほかに居宅と推定される建物・区画溝もあり、地域の中心となる遺跡であることは間違いない。

条里水田と灌漑用水路 高崎台地東部は、近年まで条里型地割の水田が広がっていた (Fig.2 航空写真参照)。昭和 50 年

代以来、長きにわたる発掘調査で蓄積された、1108年の浅間山噴火に伴う火山灰(As-B)直下の水田跡も、基本的には条里型地割に則った畦畔配置である。これら条里水田は、表層で地割の確認できない微高地を境にいくつに分かれる。

また、当該地域は榛名白川から取水する長野堰(用水)系統の受益地域である。長野堰については諸説あるが、基本となる部分は古代まで遡る開鑿と思われ、これに繋がると思われる大溝が発掘調査で確認されている。ここでは周辺地域における表層条里と水田遺跡の発掘調査成果を交え、条里と大溝に地名を冠した名称を仮に充てて、説明しておきたい。

倉賀野東条里 高崎台地上の南東端にあり、JR倉賀野駅の東方に広がる。昭和40年代までは条里水田区画が明瞭に残っていた。早くに開発された為、発掘調査事例はほぼ無い。長野堰→倉賀野堰→五貫堀を経由した灌漑系統が想定される。

倉賀野西条里 高崎台地上で、JR倉賀野駅の西方に広がり、北西に中居条里が連続する。元来は条里水田区画が明瞭に残されていたが、昭和初期の高崎線倉賀野操車場や昭和40年代の工業団地造成、近年の区画整理によって消滅寸前である。ただし近年の区画整理では事前の発掘調査が行われており、地割の復元も試みられている(大野2013)。長野堰→倉賀野堰→五貫堀という灌漑系統が基本と思われ、五貫堀自体も条里地割に則っている。現状で北寄りは倉賀野堰から分水される川の面堰を経由するようであるが、中世以降の可能性がある。また、下之城仲沖遺跡(13)・下之城村東遺跡(15)では条里坪線に則った平安期の大溝が長距離確認され(山本2013)、五貫堀からの取水と思われる(ヘ・下之城大溝)。

下佐野条里 粕沢川の開析谷と烏川によって隔離された高崎台地上で、北は中居条里に連続する。早くに土地改良されて消滅しており、米軍写真に姿を残すのみである。調査事例もほとんど無い。現在は長野堰→倉賀野堰→下佐野堰の灌漑系統であるが、陸軍迅速速図によれば明治年間には、下佐野堰は長野堰から、倉賀野堰より上流から直接分水していた。

中居条里 高崎台地中央付近、北西から南東に形成された中居の微高地と倉賀野堰の間、南は倉賀野西条里と下佐野条里に連なる。市街化でほぼ消滅しているが、南半は下中居条里遺跡として発掘調査された。北半は調査されることなく市街化してしまった。長野堰から直接、ないしは倉賀野堰を経由する灌漑系統が予想される。

高崎条里 高崎台地上の西縁、JR高崎駅周辺に広がる。南に下佐野条里が連続し、北は長野堰を挟んで飯塚条里と対峙している。現在の街区道路に名残は残すが、特に西半は近世高崎城以来の継続的な都市化によって完全にわからぬことは岩押遺跡(11)や高崎競馬場遺跡(12)等の発掘調査で条里地割の水田跡が確認されている。本条里の中央には明治期までは下佐野堰が南流しており、長野堰から直接、あるいは下佐野堰を介しての灌漑系統が推定される。また本条里は、下佐野堰を通じて下佐野条里と不可分な関係と見做すことが可能で、一連のものとすべきかも知れない。

矢中条里 高崎台地の北東半、中居の微高地と台地北東縁の間に広がり、北西で柴崎条里、南東で倉賀野東条里とつながっている。昭和40年代末からの団地造成と50年代の土地改

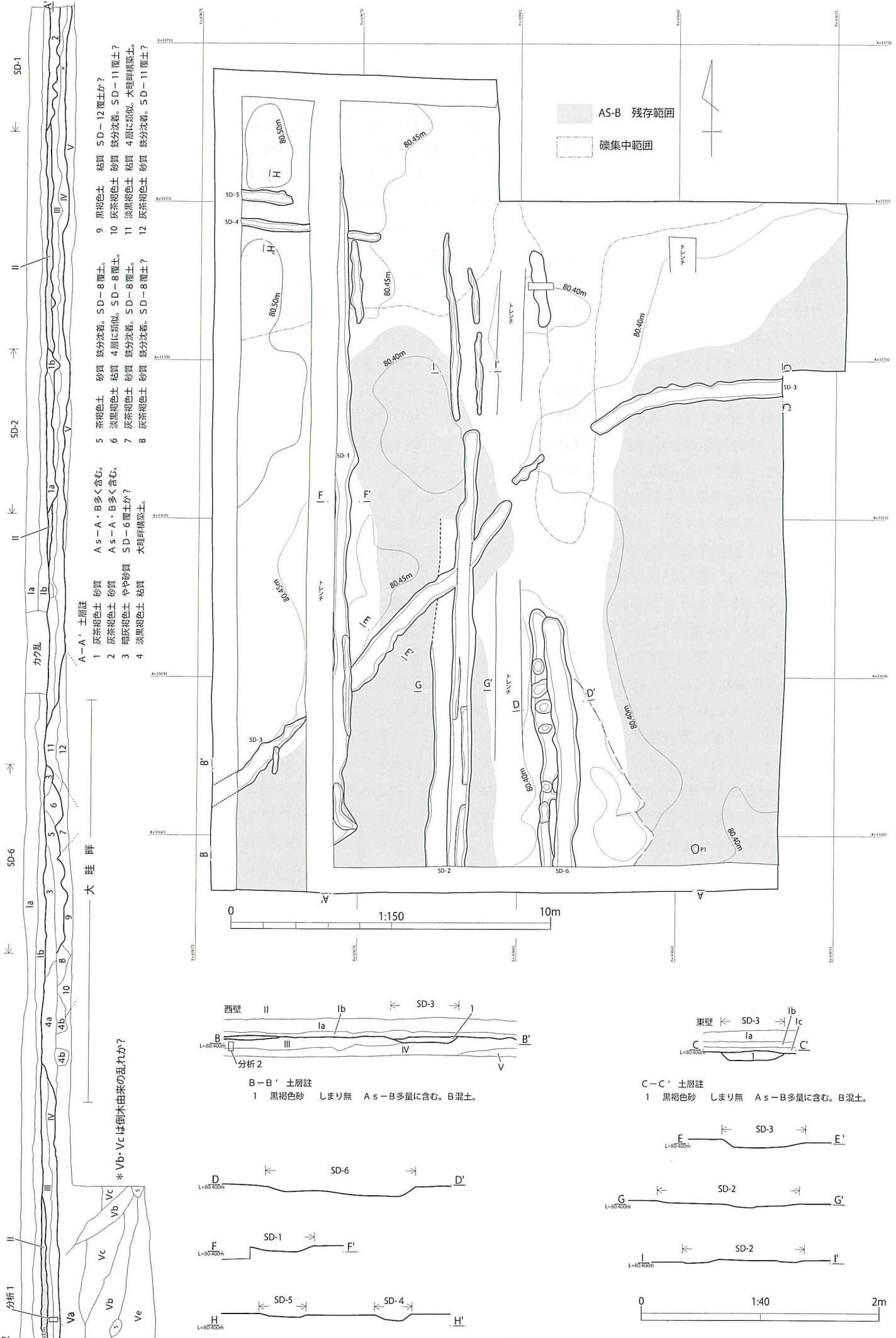
良によって消滅状態だが、航空写真による観察では元々表層での条里地割は不明瞭であった。土地改良時に天王前遺跡(23)や矢中村東遺跡(25)等、矢中遺跡群として広域な発掘調査が行われた。現状で長野堰→矢中堰ないしは地獄堰を経由する灌漑系統で、発掘調査によって確認された平安期に機能する大規模水路(矢中大溝・ホ)は、地獄堰からの分水と思われる。なお、矢中大溝の水溜遺構(矢中村東遺跡)から「物部私印」銅印が単独で出土している。

柴崎条里 井野川低地帯の中に広がり、高崎台地北東縁と井野川の形成した自然堤防の間である。昭和50年代の土地改良で消滅したが、航空写真で見る限り比較的整然とした条里地割水田が観察される。土地改良に先立ち柴崎遺跡群(27)として広域の発掘調査が行われている。現状を重視すると長野堰→地獄堰の灌漑系統と思われるが、発掘調査では条里地割に制約を受けた複数の古代大溝が確認されており(ロ~ニ)、一定の勾配を有する高崎台地上とは異なる様相のようである。

郡・郷の比定 本地域には、律令制下の片岡郡・群馬郡・那波郡の何れかに属するが、郡衙遺跡等は知られておらず、郡の中枢は含まれない地域と考えられる。新編高崎市史では、高崎城周辺で確認されている集落遺跡(地図外)を取り上げ、その地がかつて赤坂と呼ばれていたことに着目し、和名抄に見える群馬郡の郷で位置の比定が不可能とされてきた「畔切」(安木利)と考えている(上原2000)。しかし今のところ具体的な文字資料を欠いている点、同等の該期の遺跡は普遍的である点を考慮すれば、この説はやや厳しい印象を受ける。

一方で鳥川対岸の金井沢碑(726建立)碑文に見える「上野国群馬郡下賛郷高田里」を下佐野遺跡周辺に比定する見解がある。群馬郡下賛郡は和名抄には登場しない郷名なので、和名抄編纂(930年代)前に再編されて群馬郡畔切郷となったという推定も可能かも知れない。いずれにせよ、高崎台地東半部のうち西側は、井野川を越えて群馬郡の可能性がある。

東側の那波郡との郡界は、短絡的には井野川がその境界をなしていたと思われるが、先の先行研究の整理で群馬郡は井野川を跨ぐ郡域と推定された。従って那波郡との境界も井野川を越える可能性もある。先に確認した古墳時代中期後半頃の前方後円墳が井野川流域に分布することを思えば、井野川は地域を別つ存在ではない。井野川を挟んで対峙する綿貫遺跡群と下滝天水・下滝高井前遺跡を、渡河点に形成された一つの遺跡群として見ることも可能だろう。その場合、瓦葺きの基壇建物や居宅とされる区画溝に囲まれた遺構の確認された綿貫遺跡群の評価が問題となる。現在、高崎市教育委員会によって調査中なので時期尚早ではあろうが、郷の中枢部分である可能性を考えたい。近隣の高崎市下斎田や玉村町斎田といった地名からは、那波郡轄田郷に比定するのが妥当に思える。古墳時代後期に綿貫觀音山古墳を頂点に形成される、東は伊勢崎市南部、北は前橋市広瀬に及ぶ中規模な前方後円墳(右島2010)の分布範囲が、そのまま後に那波郡として編成された可能性が考えられる。反面、群馬郡とした場合に、基壇建物を倉庫と見立てると『上野国交代実録帳』に見える別院の可能性も浮上する。いずれにせよ、今後の研究の深化が期待される地域であることは確かである。



III 検出された遺構と遺物

1. 調査区概観

調査区は予定建物部分を対象とし、仕様書に基づき A s - B 直下を調査面としたが、終盤に下層から遺構が検出されたので、監督員と調整したうえで 188m²を第2面として調査、最終的な調査面積は 624.6m²である。

基本層序については、As - A を含む耕作土の I 層、その下

に不整合で As - B が一次堆積する II 層、As - B 直下の水田耕作土に対応する黒色粘質土の III 層、古代の耕作土である IV 層、その下は不整合で礫を多く含む高崎泥流に対応する V 層となる。第1面は II 層直下、第2面は V 層上面だが重機掘削の恣意的な面である。以下、調査面ごとに説明する。

2. 第1面の調査状況 (Fig. 5~7)

検出した遺構は溝跡 (SD) 6 条と小穴 (P)、それと A s - B 直下の水田と思われる面、条里地割の坪界大畦畔と思われる帶状の土質変化範囲である。表土除去の際に A s - B まで重機掘削したが、B が無い部分は判別し辛く、削り過ぎた。違和感を覚えてその日の夜にインターネットで過去の航空写真を確認したところ、調査地点は条里坪界に相当することが判明、違和感は解消されたが後悔が残った。着手前に周到な下調べをしてさえいれば、この失敗は未然に回避できたはずである。反省点であり、今後この種の遺跡を調査する際の心構えとして、敢えてここに記しておく。以下、調査遺構について記述する。

SD-1 調査区西寄りをほぼ南北に走る溝跡である。市教委による試掘調査(平成27年6月16日実施)によって西側の立ち上がりの大半と北端を失っている。南端は A s - B である II 層を掘り抜かない深さであった為、確認面からは消えてしまうが南壁の土層断面に現れている。最も残りの良い断面 F ライン部分で上幅 0.5 m、断面は皿状、一部は溝状に窪んでいる。並行する枝番を付した (SD-1 b)。底面は工具痕状の凹凸があり、覆土は I 層に近く、底面に A s - A と思われる火山灰を確認した。陶器・土器片が少量出土したが混入である (Fig.12-1・2)。天明年間以降の耕作痕と思われる。

SD-2 調査区中央西寄りをほぼ南北に走る溝跡。南寄りは僅かに段差があり、断面観察の所見では浅い溝が 2 条重複した状況と判断される。断面 G ライン部分で上幅 1.2 m、北は一度途切れ、その先は細溝が 2 本平行する。覆土は SD-1 とほぼ同じである。中世陶器片が 1 点出土したが、混入と思われる (Fig.12-2)。近世の耕作痕としておきたい。

SD-3 調査区南西から北東にかけ、蛇行する溝跡。調査区中央付近の坪界相当で途切れている。底面には鋤痕状の凹凸が顕著で、断面 C ラインで上幅 0.52 m、E ライン部分で上幅 0.7 m である。覆土は A s - B を主体とする黒色砂質土で、いわゆる B 混土である。遺物は無いが、土の特徴から中世前半と考えられる。溝は基盤となる V 層の範囲と対応しており、遺跡周辺の微地形も考慮すれば、地形の変換点に設けられた根切り溝のような性格が考えられる。

SD-4 調査区北西寄りにある溝状遺構で概ね東西方向である。市教委による試掘調査で一部を失い、西は調査区外へ、東は途切れる。断面 H ライン部分で上幅 0.3 m、断面皿状で覆土は I 層に類似し、近世以降の耕作痕と思われる。

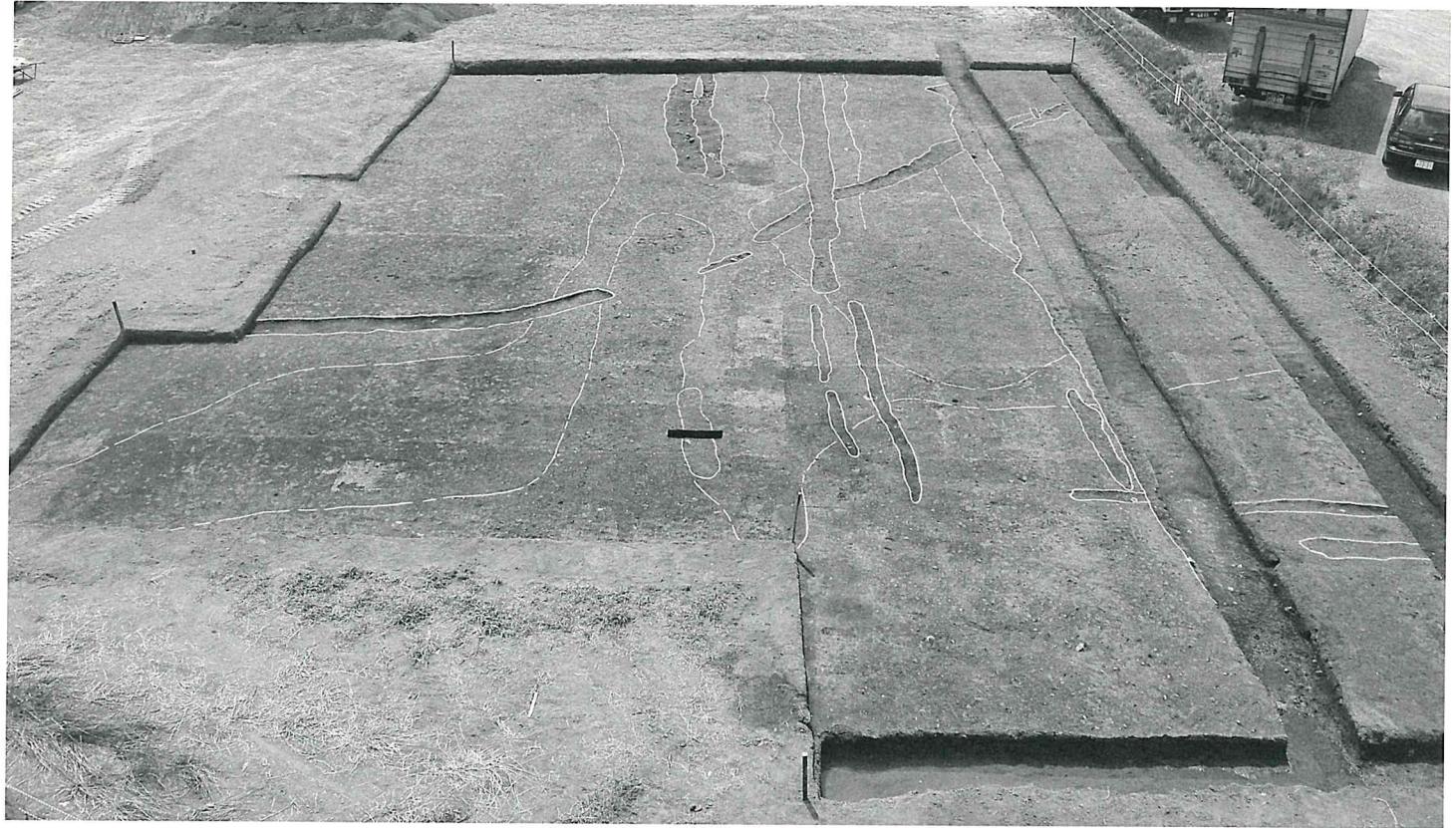
SD-5 SD-4 の北側に平行する溝状遺構で、概ね東西方向である。西は調査区外へ、東は SD-1 より短く途切

れてしまう。断面 H ライン部分で上幅 0.4 m、断面形状や覆土は SD-1 と同質で、同時期・同機能が想起される。

SD-6 調査区中央やや東寄りをほぼ南北に走る溝跡である。この部分は本節冒頭で吐露したように表土掘削時に削り過ぎた場所で、確認は IV 層上面である。2 条の溝が重複した状態で、両者合わせた幅は断面 D ライン部分で上幅 1.23 m、共に浅い皿状である。覆土は調査区内に見られない硬質細砂質土で、恐らく搬入され突き固められた土と考えられた。底面近くには基盤層由来の円礫が顕著で、意図的な混入を思わせた。覆土上位は IV 層が覆うが、後述するように A s - B 下水田の耕作土となる III 層は無く、当然 A s - B も確認されなかった。かかる状況から現場段階で SD-6 の上には大畦畔が存在したと考え、その視点で層の乗合を改めて観察した結果、溝内の砂質土と大畦畔構成土は不可分であることから、SD-6 が大畦畔と一連の構造物、つまりは基礎工事にかかるものと理解した。なお、底面は東側の溝は比較的フラットであるのに対し、西側では浅い皿状の窪みが連なるように掘り上がった。この窪みは道路状遺構における路床改良と酷似しているので、西側の溝は、畔上が道路として使用された結果とも考えられるが、今となっては検証不可能である。遺物は土師器小片が円礫間から出土しており (Fig.12-4)、本遺構はそれが示す時期、8 世紀後半と考えられる。類似遺構として、倉賀野上樋越遺跡 B 区 48 号溝がある (大野 2014)。

水田跡 Fig. 5 の平面図で濃網をかけた範囲には、薄いとは言え As - B が一次堆積しており、その直下の精査によって僅かな緩い起伏をもつ平坦面が検出された。状況からして水田面と判断するが、小畦畔は無い。また、第2面 S X-1 の上は皿状に窪んでいるが、経年による地盤沈下の可能性もある。なお、自然科学分析の所見では稲作の可能性は低いとされるが、耕作期間が短かったが故の結果である可能性が指摘されており (IV章参照)、使用頻度は低かったようである。

大畦畔の痕跡 先に記したように、SD-6 の上面と重なる部分に、南北方向の大畦畔が想定された。一方で調査区寄りを見ると、基盤の V 層に近い黄褐色土が帶状に確認された (図中の薄網部分)。この部分には基盤層由来の礫が多いのも特徴である。時間の制約で詳細な調査が果たせなかつたが、大畦畔部分であるが故に耕作の攪拌をあまり受けなかつた結果として V 層類似土が帶状に残ったと推定される。礫が多い点については、畦畔両側の水田耕作によって下層から上がってくる礫がその都度畦畔上に弾き出され、それが累積された結果と考えられた。



第1面調査状況（北から）

表土下30cm程度でAs-B一次堆積層が確認されるが、残存範囲は半分程度。昭和の土地改良のダメージが主な原因であると思われるが、調査区北西1/3程度が微高地にかかり、近世以降の耕地拡大によって削平されたことも大きいだろう。中央に条里の東西坪界大畦畔の痕跡、南西から北東にかけて蛇行する中世の溝（SD-3）、南北・東西の溝（SD-1・2・4・5）は近世の耕作痕と考えられる。



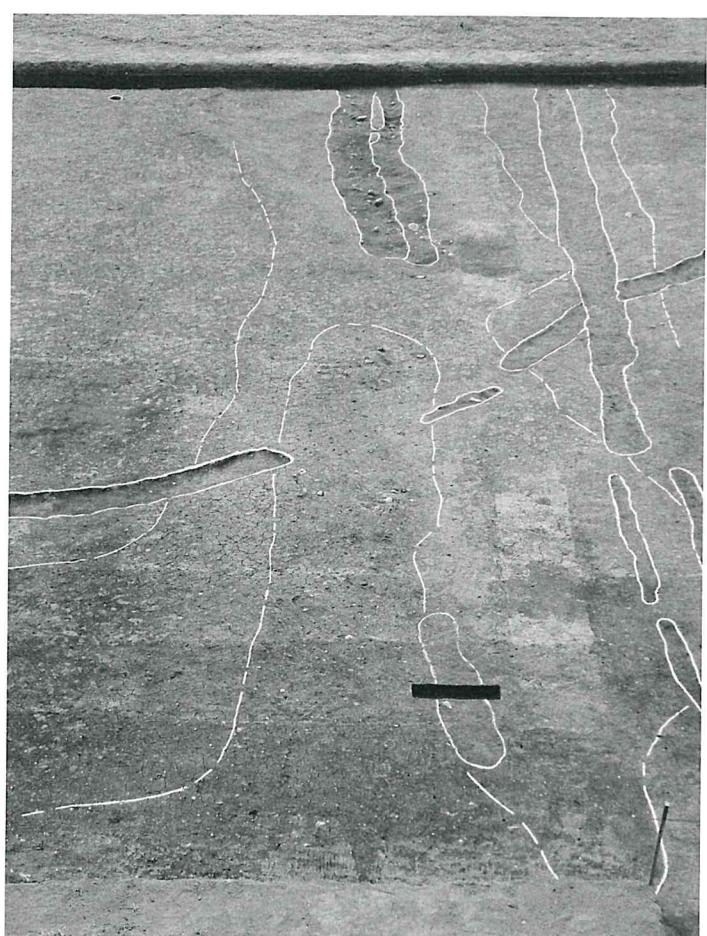
As-B直下の状況（北から）

概ね平坦だが、細かく見ると小窪地多数。水田と思われる。



大畔部分の土層断面（北から）

わかり難いが、溝状（SD-6）の上は少し盛り上がる。



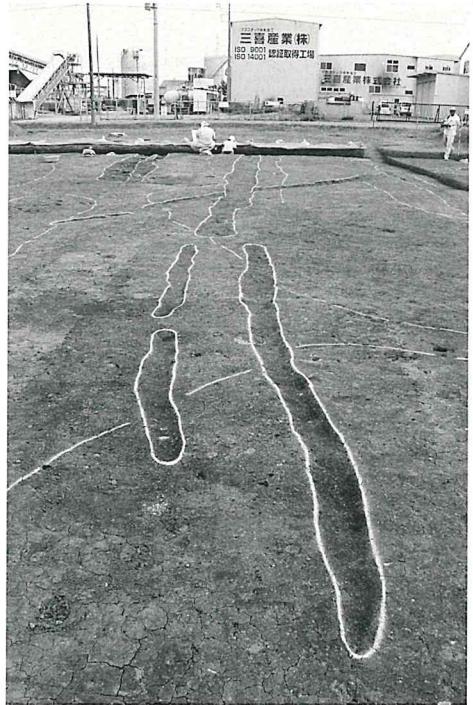
東西坪界の大畦畔痕跡（北から）

手前（北半）は基盤層由来の礫集中範囲、奥（南半）は硬砂覆土で下層に礫を多く含む溝状（SD-6）である。北半は継続的な耕作に伴う礫の排除と集積が繰り返された結果、南半は畦畔の基礎構造を示すものと考えられる。なお、北半は微高地、南半は低地という地質環境の根本的な違いが、その構造差として現れたものと思われる。

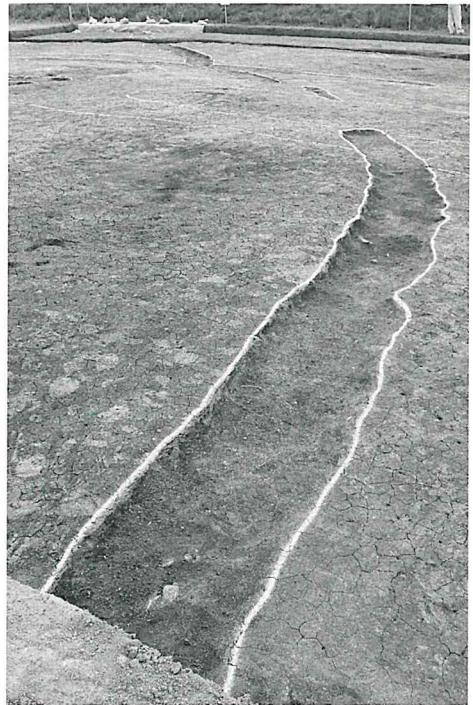
Fig.6 第1面の遺構写真（1）



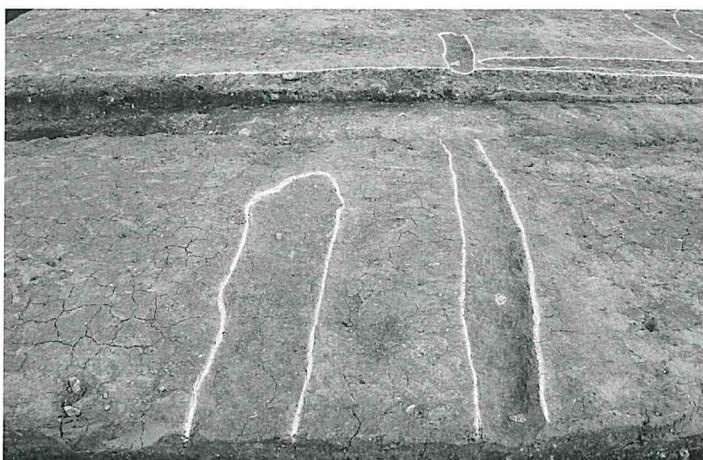
SD-1 (北から)



SD-2 (北から)



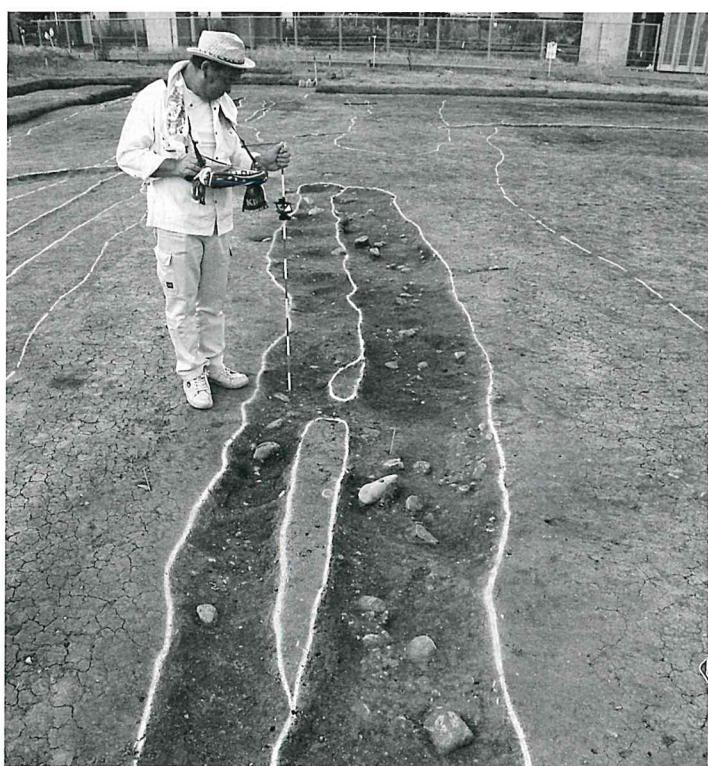
SD-3 (北東から)



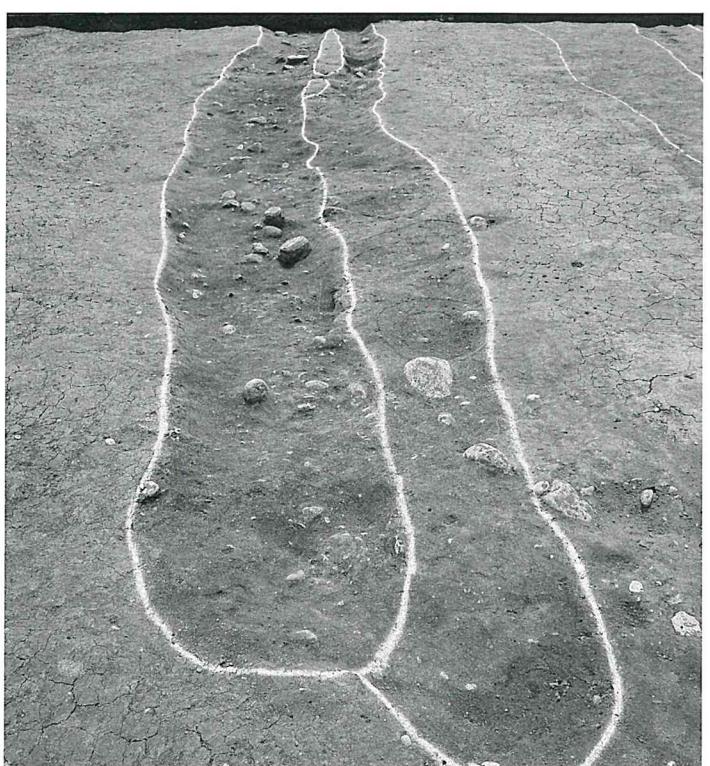
右SD-4と左SD-5 (西から)



SD-6 検出状況 (北から)



SD-6 完掘状況 (南から)



SD-6 完掘状況 (北から)

覆土は鉄分の沈着した硬砂で、基盤層由来の礫を多く含む。2条が重複した状況に掘りあがるので複数時期を想定できるが、断面の観察では判然とせず、明確な切り合い関係は不明であった。

Fig.7 第1面の遺構写真 (2)

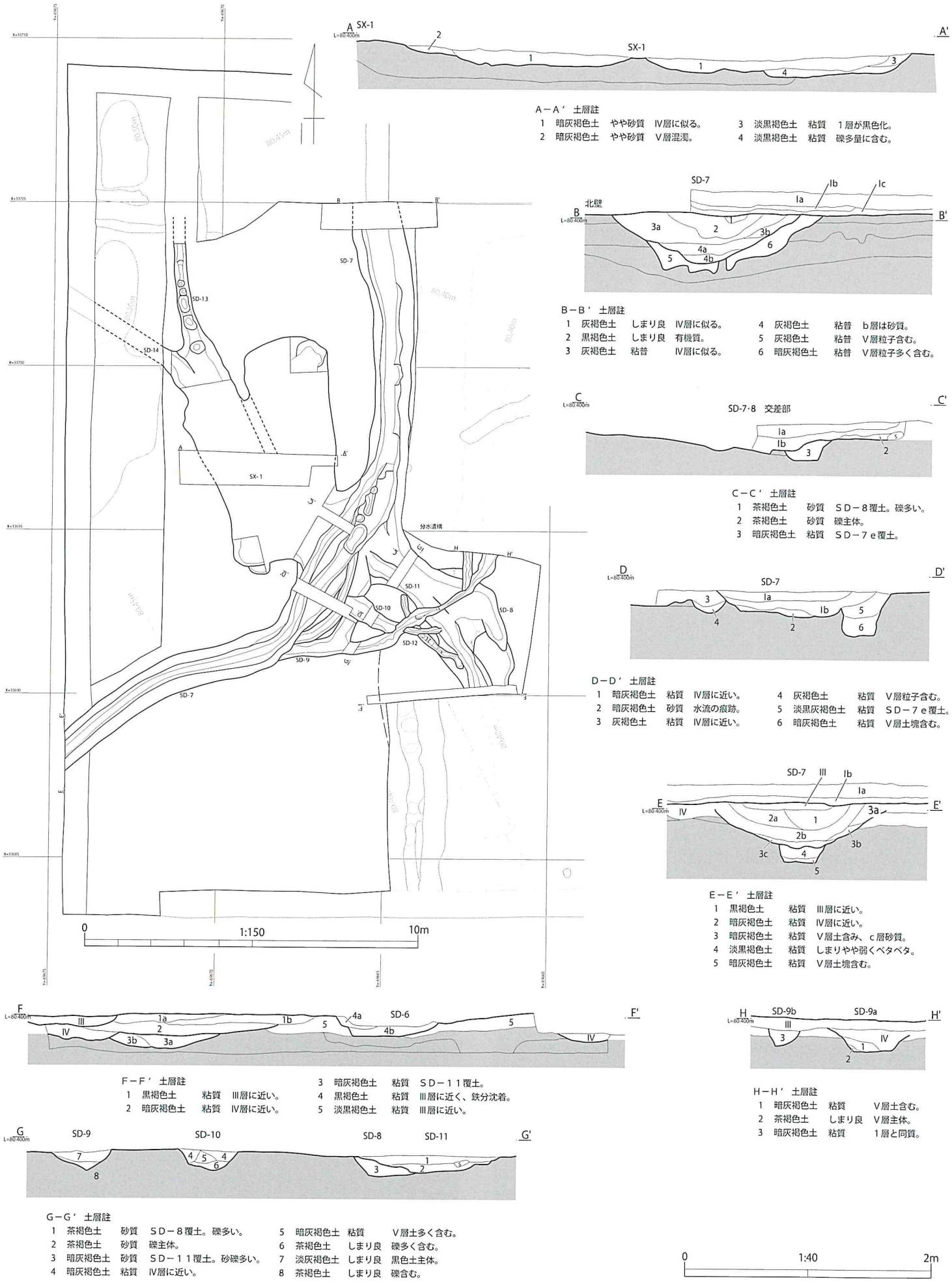


Fig.8 第2面の遺構

3. 第2面の調査状況 (Fig. 8 ~ 11) —————

第1面の調査完了後、ダメ押しとして調査区西壁のトレントに見えていた溝状輪郭を追いかけてV層まで重機掘削した。結果として確実な遺構を複数確認するに至ったので、市教委監督員に口頭報告した上で直ちに第2面として調査した。検出遺構は溝跡 (SD) 8条と池状遺構 (SX) 1カ所である。

なお、第2面の調査は仕様書に無い範囲であったが、As-B直下以前の水田関係遺構ではないかという、現場レベルでの「直感」で動いた部分が大きかった。集中豪雨と地下水位上昇で現場は連日水没、「可能な限り」というクオリティであったことは事実だが、報告書を執筆している今は「ベストを尽くした」と思う。以下、各遺構について説明する。

SD-7 調査区中央に屈曲を持ち、北半はほぼ南北方向、西半は南西に向かって蛇行する溝跡で、細かい砂の堆積を認めることから、水路であったことは確実である。時間・人手の問題から、不本意ではあったが覆土の大半を重機で除去したため、デリケートな情報は失った可能性がある。上幅は平均1.2m、下幅は平均0.2mで、断面は箱薬研状だが特に西半では上半分が大きく開く漏斗状で、断面観察からは断面箱薬研状の時期と断面鍋底状の二時期が確認できた。底面標高は湧水で良くわからない部分が多いが、土層断面で確実な値を拾うと北に下がっているので、流水は西から北と判断される。

中央付近の屈曲部はa~eの最低5条が絡み合った溝の束といった状態で、後述のようにSD-9・10・11へと分水する箇所となっていることから、水量・水勢をコントロールするために幾度も掘り直されたのだろう。重複遺構としてはSD-8~11、SX-1があり、屈曲部分に集中し分水遺構を形成している。断面観察ではSD-8とSX-1の覆土は一連として本遺構上層に乗るので、その段階には本遺構はほぼ埋没していた。出土遺物は調査時に度重なる冠水によって詳細な出土状態が不明となってしまったが、分水遺構とした屈曲部付近から土師器・須恵器細片が一括で採集され(Fig.12-6・7)、9世紀後半を中心とした時期で本遺構の時期の一端を示す。開鑿時期がいつまで遡るのかは不明だが、北半は上の面で確認された坪界と重なるので、条里地割の影響は確かだろう。また、As-B直下においては全く認識できなかったことから、廃絶はそれ以前であったことも明らかである。

SD-8 SD-7の屈曲部から南東へ延びる溝跡だが、平面形態は不定形である。調査区の関係で部分的な確認であったが、南端ではほぼ南北方向を指向していることから、基本的には条里地割の影響下にあるものである。南の延長は第1面の南壁土層断面(Aライン)の所見では明確でないので、調査した南端から南はさほどせずに底高が上がって消えているのだろう。反対側はSD-7を超えてSX-1へと同質の覆土が続くことから、本来は同一の遺構であったことは明らかである。流水勾配はSD-13・14からSX-1を経由して南の終点へ流れていると推定され、その先には水田が広がっていたものと思われる。重複遺構はSD-7以外にSD-11があり、本遺構の下に痕跡的に残る。覆土は砂質土で、第1面SD-6にやや近い印象である。また底面には拳大の礫が多く、掘り上げ直後の印象は疎らな石敷きであったと思われ、同様の石敷きはS

D-7の上を越えてSX-1まで連続していた。正しく掘り上げていれば検証の俎上に上げられたかと思うと悔やまれるが、これは調査の先を急いだ失敗である。遺物は土師器破片が出土しているが、混入と思われた。

SD-9 西から来るSD-7が最初に屈曲する所から派生する溝跡で、7dとは切り合いは認識できなかった。北東端近くで南北方向に近くなるので、調査区外北の延長はSD-7・8同様、条里坪線に沿うと考えられる。北端近くでSD-9aとSD-9bの2条に分かれるが、9aの方が土層平面観察では古いと判断されるので、これは分岐ではなく付け替えの結果である。底高は9aが浅く9bが深いことから、より深く掘り直されたと理解される。流水勾配は底高にほとんど差がない為に判断に苦しむが、恐らくSD-7dから分水したものと考えられる。重複遺構はSD-8・10~12があり、掘り下げ時の所見ではSD-10・11・12を切り、SD-8に切られるようだが、実のところは判然としない。遺物として土師器小破片が底面近くから出土しており、9世紀中葉頃の特徴をもつ土師器坏で(Fig.12-5)、本遺構の時期を示す。

SD-10 SD-7とSD-8をショートカットで繋いだかのような位置関係にあり、SD-7dを切り、SD-7a・bとSD-9に切られる。SD-12とは不明、東端はSD-8・11に切られるように終わるが、切り合い関係は不明であった。平面・断面の土層観察ではSD-7cと一体の覆土であるので、SD-7cから分水し、SD-8・11方向の水田へ導水していたものと考えられよう。出土遺物は無い。

SD-11 SD-8の下から確認された溝で、SD-10に切られる。確実なところではSD-11→10→8の順で、同じ位置関係のSD-8との間にはSD-10が入る。底面標高はSD-7a・bと7eが近いので、それから分水して南東方向の水田へ導水したものと推定される。出土遺物は無い。

SD-12 SD-8・11を短くバイパスするような位置関係で、覆土からはSD-8に伴うと思われるが、北端のSD-8との接続部分は浅くわかりにくかった。その性格については、例えは土囊等による一時的な堰を設置した場合、越流しないようにする余水吐のようにも思える。出土遺物は無い。

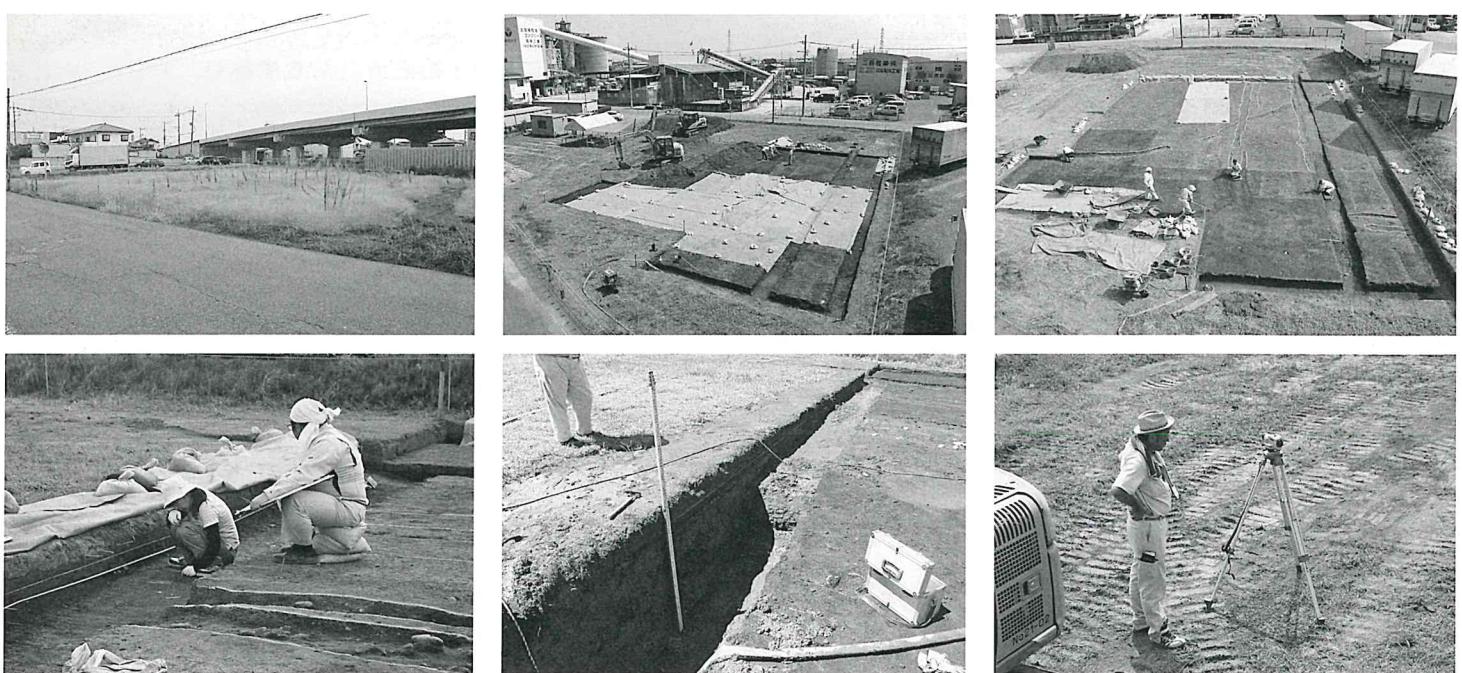
SD-13 SX-1の北西にある溝跡で、SD-14と重複するが前後関係は不明、底面は南へ緩く下がる。底面は窪みが連続し、覆土は黒褐色である。本来はSX-1への導水溝として一連の機能が推定されるが、南端はSX-1上層の砂質土に覆われている。出土遺物は無い。

SD-14 SX-1北西の溝跡で、SD-13と重複するが同時存在の可能性もある。調査区西壁トレントの所見では北西方向から来る。SX-1との土層の関係はSD-13と同じで、同様の機能が推定される。出土遺物は無い。

SX-1 SD-8で記したように、本来はSD-7を超えた同一の遺構と考えられる遺構である。平面プランは3×1.7mの概略長方形に広がっており、底面には基盤層由来の拳大の礫が集中している。具体的な機能は不明だが、SD-13・14によって集水される状況からは、苗床等に活用される水溜ないしは水場といった印象を受ける。



Fig.9 第2面 分水構造の拡大





第2面調査状況（北から）

第1面の約半分程度を第2面として調査。調査例のあまり無い、古代の基幹水路と分水遺構が検出された。



SD-7（南西から）

SD-7は、南西方向から北へ流れた基幹水路と考えられる溝で、南西半分は地形に沿って緩く蛇行、屈曲部を挟んだ北半分は条里の坪界に沿って直線的である。溝は断面箱築研状で、断面観察から少なくとも2回以上の掘り直しが確認でき、断面が深い箱築研状から浅い皿状へと変化する。分水遺構と共に、条里外縁部であるが故に検出されたのだろう。

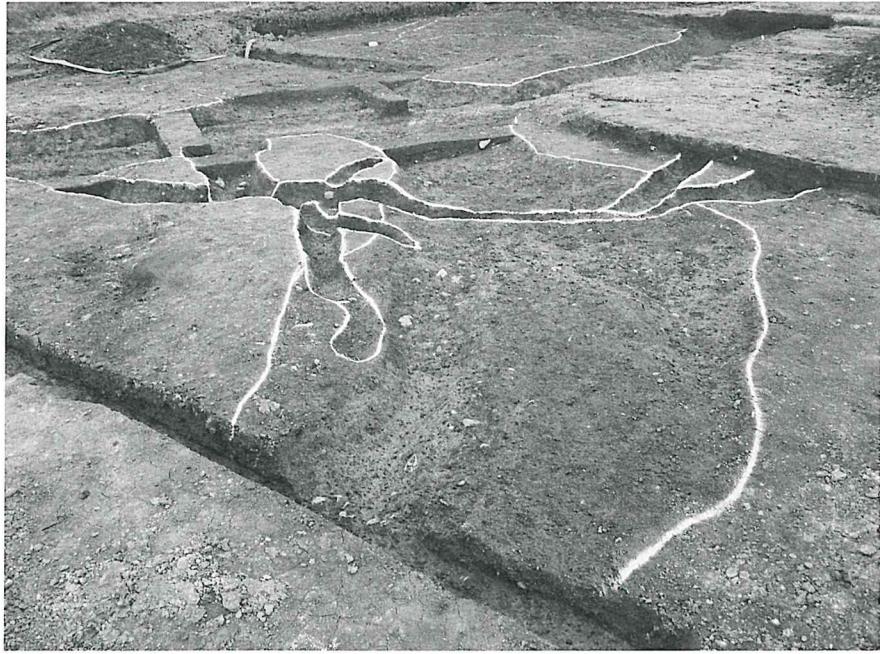


SD-7 屈曲部（北西から）



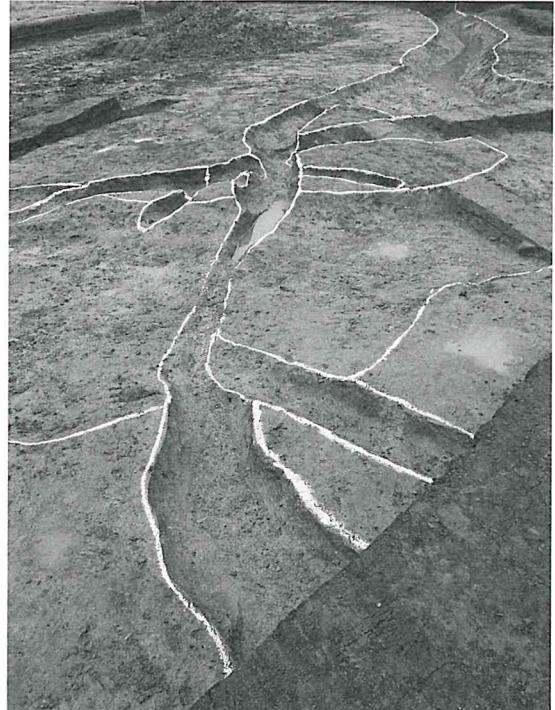
SD-7（北から）

Fig.10 第2面の遺構写真 (1)

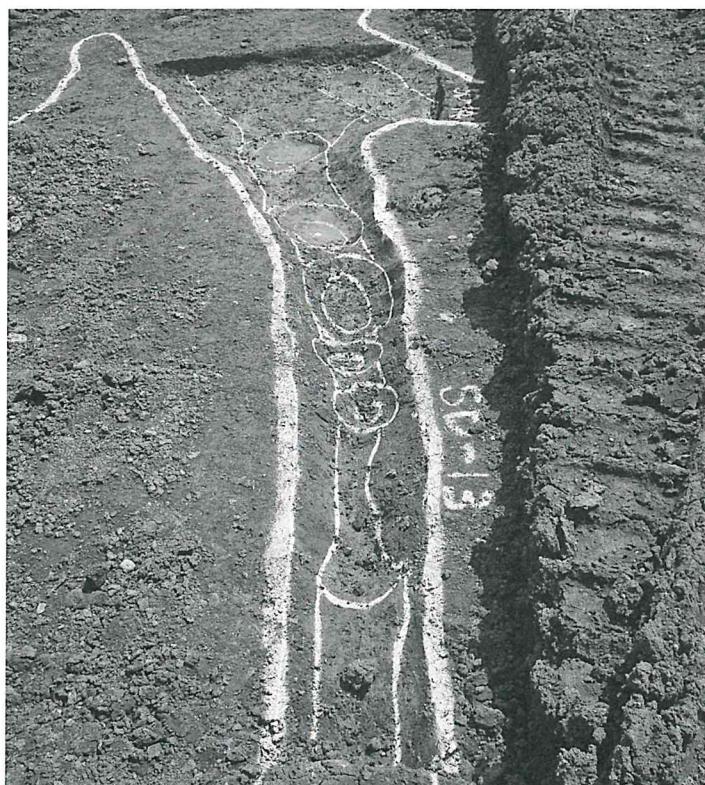


分水遺構 SD-8～12（南東から）

SD-7 屈曲部から分水される溝群。複雑に切り合い重なる様は、この場所での分水に強い規制が働いていたことを思わせる。



SD-9（北から）

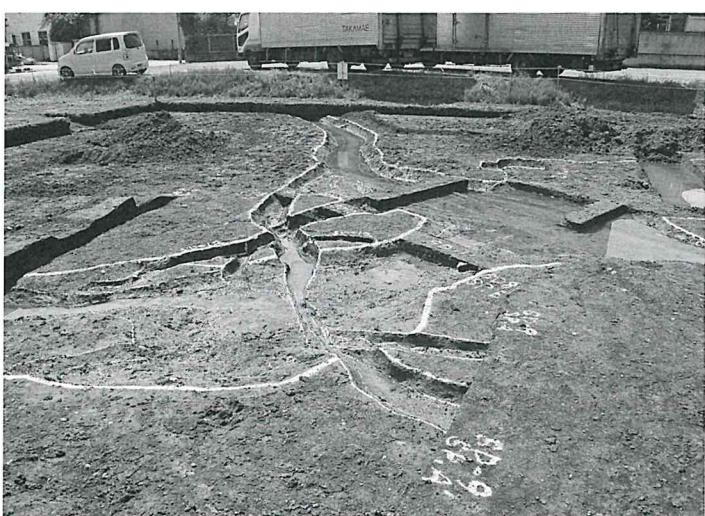


SX-1（北から）

水溜め状の浅い窪地。砂質土で埋まり、底面には基盤層由来の礫が集中。SD-7 上層を経由して SD-11 に連続する。

← SD-13・14（北から）

2本の溝は SX-1 を経由して SD-7 屈曲部で合流する。



分水遺構付近（東から）



分水遺構と SD-7 屈曲部付近（北東から）

Fig.11 第2面の遺構写真 (2)

4. 出土遺物

第1面、第2面共に、水田遺構という性格上、出土遺物は少ない。僅かな出土遺物も大半が小破片で、磨滅の進んだ流入・混入と考えられるものである。とは言えこれら破片の中には、明らかに遺構の時期を示すと判断されるものもあり、ここでは多少強引ではあるが、図化を試みた。以下、掲載順に説明していきたい。

Fig.12-1 は第1面のSD-1から出土した陶器片で、焼成・胎土からは瀬戸戸美濃産の擂鉢と思われる。内外面鋸歯がかかり、内面には櫛歯状工具による擂目がある。口縁部を欠く為に判然としないが、近世であることは間違いない。

Fig.12-2 は第1面のSD-1から出土した須恵器片で、混入遺物である。ロクロ口が明瞭で、外反する形状も勘案すれば8世紀後半～9世紀前半と思われる。焼成は甘く軟質で暗灰褐色、胎土には細砂粒をやや多く含む。

Fig.12-3 は第1面のSD-2から出土した陶器破片で、焼成・胎土からは常滑産と思われる。器種は胴部破片のため判然としないが、内面が滑沢を持つまでに磨滅していることから、中世の捏鉢と考えられる。良く焼きしまって明茶褐色を呈し、胎土は精良である。混入と思われる。

Fig.12-4 は第1面のSD-6出土の土師器片で、間接的にはSD-6に伴う可能性がある。やや内屈する口縁部形態からは、8世紀後半と推定される。焼成良好で淡茶褐色だが風化顕著、胎土には砂粒を含む。

Fig.12-5 は第2面SD-9から出土した土師器片で、溝底から数点の破片がまとめて出土したので、伴うとみてよいだろう。接合しないので正確な器形は知り難いが、平底気味で口縁部は外反することは確かで、9世紀中葉頃と思われる。焼成は普通で淡茶褐色、砂粒多く含み風化が激しい。

Fig.12-6 は調査終了後に排土山で採集した須恵器片で、その位置関係からはSD-7の可能性がある。口縁部を欠いているが回転糸切無調整の底部から、9世紀後半頃と推定される。焼成は比較的硬質で暗灰色、白色粒（石英？）を含む。

Fig.12-7 は第2面調査時に排土中から採集した須恵器片で、調査区内出土としかわからないが、SD-7の可能性がある。口縁部の外反する器形で、9世紀後半～10世紀前半頃かと思われる。焼成は軟質で淡灰褐色、白色砂粒と結晶片岩粒が含まれ、藤岡・吉井窯産と推定される。

Fig.12-8 は第1面の大畦畔付近のⅢ層中から出土した須恵器片で、口縁部を欠くために明確な時期は不明だが、硬質の焼成から9世紀でも新しくない時期と思われる。焼成良好で暗灰色、胎土は白色砂粒が目立つが精良である。

Fig.12-9 は調査区南壁断面のⅣ層中から出土した須恵器片で、口縁部を欠くために明確な時期は不明だが、9世紀後半～10世紀前半頃と推定される。焼成は軟質で淡灰褐色～黒褐色、白色軟質粒（凝灰岩？）と砂粒を含み、粉っぽい印象を受けるものである。

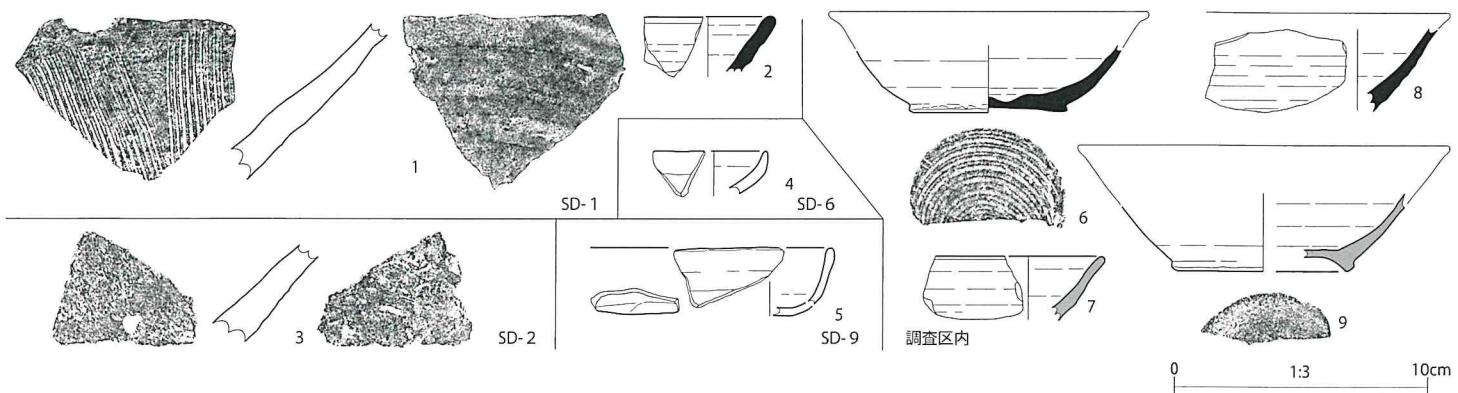


Fig.12 出土遺物

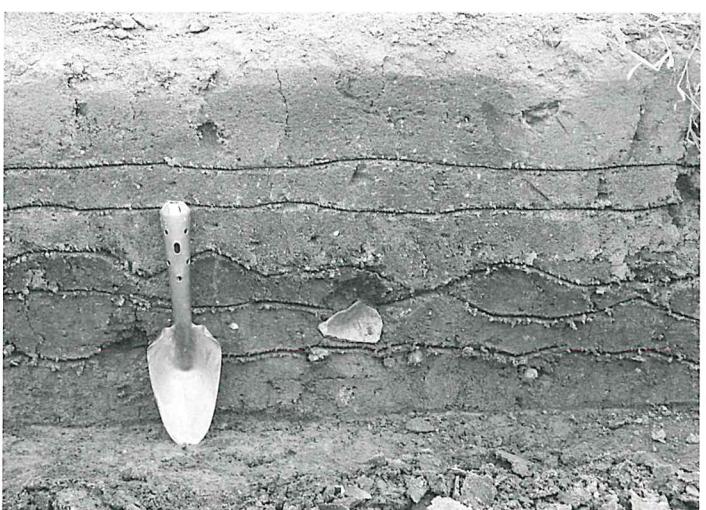
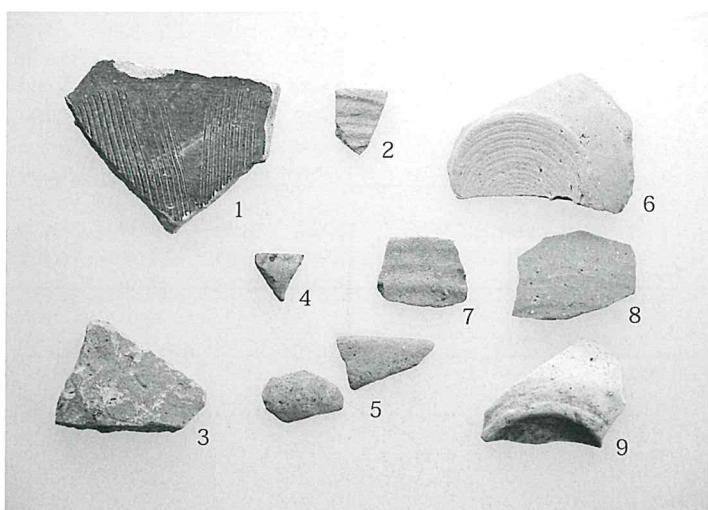
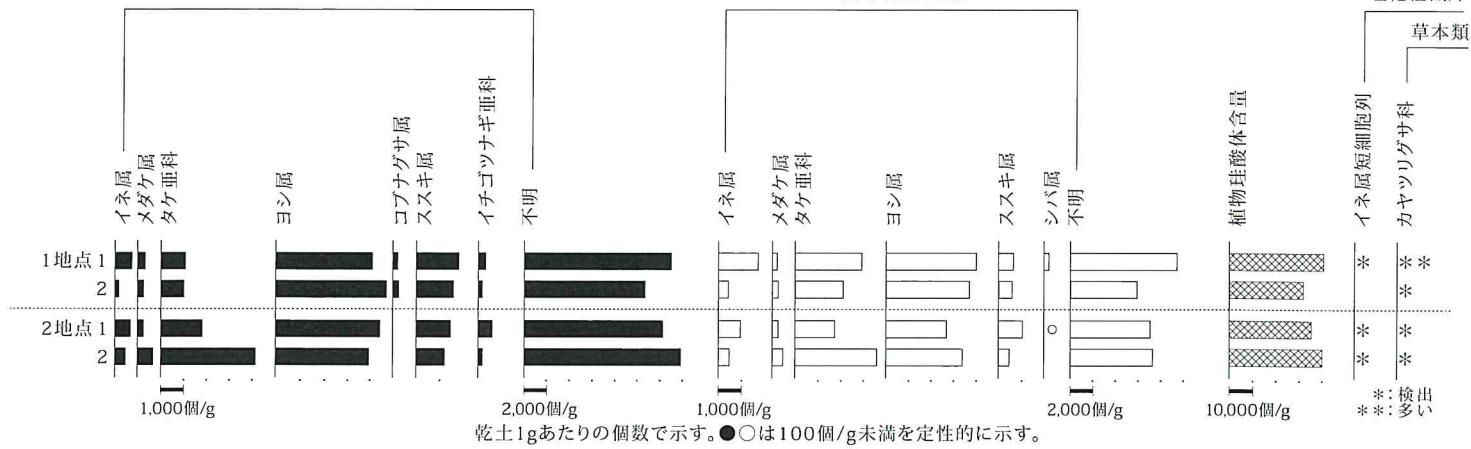


Fig.13 出土遺物集合(左)とFig.12-9 出土状態(右)

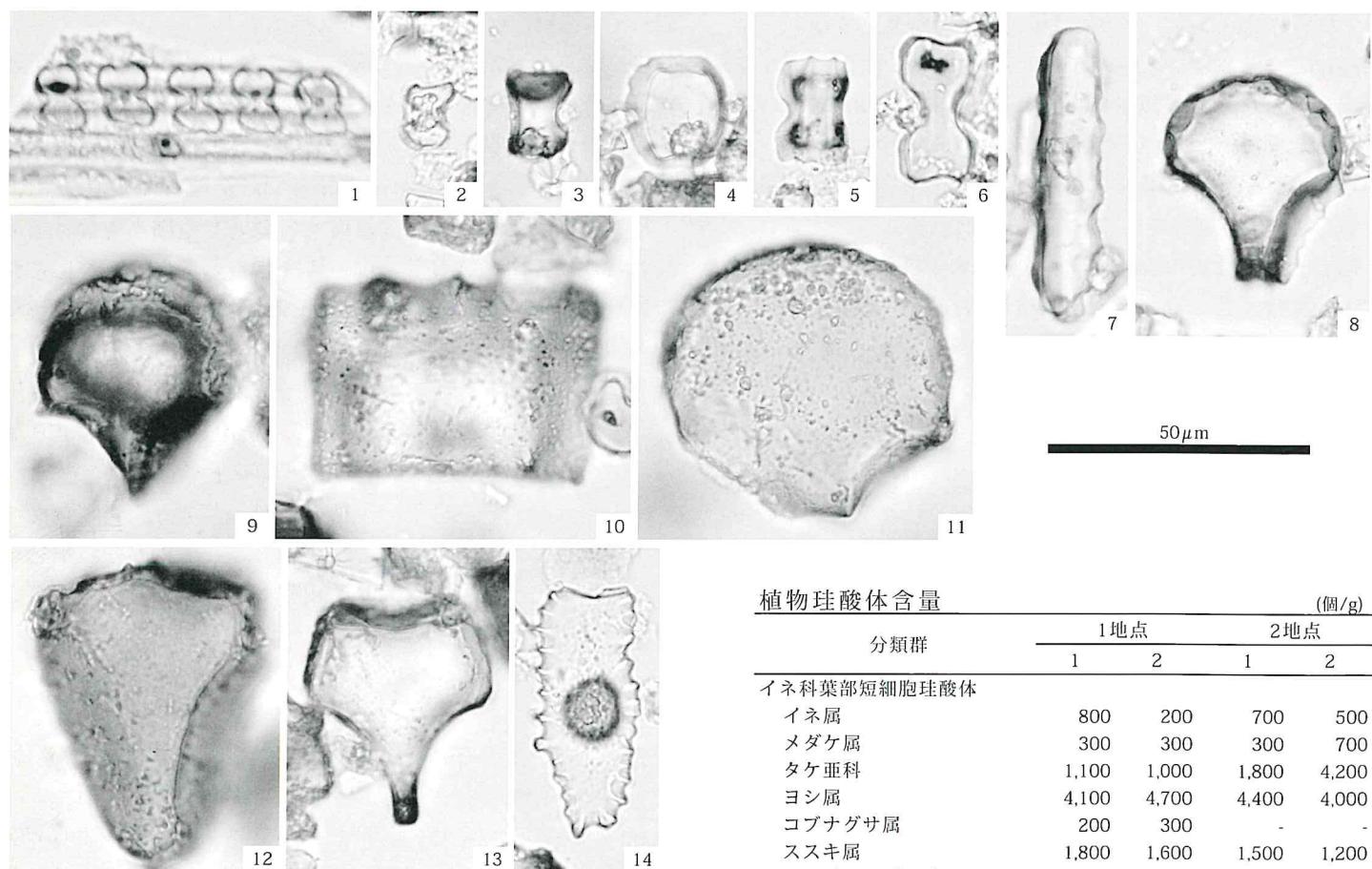
短細胞珪酸体

機動細胞珪酸体

珪化組織片



植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(1地点;1)
2. イネ属短細胞珪酸体(2地点;2)
3. メダケ属短細胞珪酸体(1地点;2)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;2)
5. コブナグサ属短細胞珪酸体(1地点;1)
6. ススキ属短細胞珪酸体(1地点;2)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点;1)
8. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
9. イネ属機動細胞珪酸体(2地点;2)
10. メダケ属機動細胞珪酸体(1地点;2)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(2地点;1)
12. ススキ属機動細胞珪酸体(1地点;2)
13. シバ属機動細胞珪酸体(1地点;1)
14. カヤツリグサ科葉部珪酸体(1地点;1)

分類群	植物珪酸体含量 (個/g)			
	1地点		2地点	
	1	2	1	2
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ属	800	200	700	500
メダケ属	300	300	300	700
タケ亜科	1,100	1,000	1,800	4,200
ヨシ属	4,100	4,700	4,400	4,000
コブナグサ属	200	300	-	-
ススキ属	1,800	1,600	1,500	1,200
イチゴツナギ亜科	300	200	600	200
不明	13,000	10,700	12,300	13,900
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ属	1,700	400	1,000	500
メダケ属	200	300	300	500
タケ亜科	2,900	2,100	1,700	3,600
ヨシ属	4,000	3,700	2,700	3,400
ススキ属	700	600	1,000	500
シバ属	200	-	<100	-
不明	9,400	5,900	7,100	7,300
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	21,700	18,800	21,600	24,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	19,200	12,900	13,900	15,700
植物珪酸体含量	40,900	31,700	35,500	40,200

珪化組織片				
イネ属短細胞列	*	-	*	*
草本類				
カヤツリグサ科	**	*	*	*
<100:100個/g未満				
-:未検出, *:検出, **:多い.				

Fig.14 自然科学分析関係図表

はじめに

倉賀野中里前遺跡 2 (群馬県高崎市倉賀野町内) では、1,108 年 (天仁元年) に浅間火山より噴出した浅間 B テフラ (As-B; 新井, 1979) 直下より水田 (以下、As-B 下水田) に伴うと考えられる大畦が検出されており、As-B 降灰以前の土地利用状況の検討が課題とされた。そこで、本分析では、とくに水田利用の可能性や栽培植物の産状などの検討を目的として、植物珪酸体分析を実施した。

1. 試料

分析に供した試料は、調査所見より水田域の可能性が高い範囲のうち大畦東側 (調査区南壁; 1 地点) と大畦西側 (調査区西壁; 2 地点) より、それぞれ As-B 直下の水田作土層に相当する可能性がある黒色～黒灰色泥層であるⅢ層 (1 地点; 試料番号 1、2 地点; 試料番号 1) と、その下位の黒色～黒灰色泥に不整合に覆われる灰色泥層のⅣ層 (1 地点; 試料番号 2、2 地点; 試料番号 2) から採取された土壤 4 点である。

2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由來した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体) や葉身機動細胞に由來した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定、計数する。

なお、分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算) を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個/g未満は「<100」で表示する。また、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

結果を Fig.14 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。以下、地点毎の産状を記す。

- (1) 1 地点 植物珪酸体含量は、試料番号 1 が 4.1 万個/g、試料番号 2 が 3.2 万個/g である。栽培植物は両試料よりイネ属が産出する。その含量は試料番号 1 では短細胞珪酸体が 800 個/g、機動細胞珪酸体が 1,700 個/g、試料番号 2 では短細胞珪酸体が 200 個/g、機動細胞珪酸体が 400 個/g であり、いずれも上位試料で含量が高い。栽培植物を除く分類群は、2 試料ともにヨシ属の含量が最も高く、他にメダケ属を含むタケ亜科、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等を伴う。
- (2) 2 地点 植物珪酸体含量は、試料番号 1 が 3.6 万個/g、試料番号 2 が 4.0 万個/g である。栽培植物は、1 地点と同様

に 2 試料よりイネ属が産出する。その含量は、試料番号 1 では短細胞珪酸体が 700 個/g、機動細胞珪酸体が 1,000 個/g、試料番号 2 では短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともに 500 個/g である。栽培植物を除く分類群は、1 地点と同様な分類群が確認される。ただし、その産状はやや異なっており、試料番号 2 ではヨシ属とタケ亜科が、試料番号 1 ではヨシ属の含量が高いという特徴を示す。

4. 考察

大畦東側 (1 地点) と西側 (2 地点) の 2箇所における植物珪酸体分析の結果、As-B 下水田の作土層と考えられる黒色～黒灰色泥および下位の灰色泥のそれぞれより、栽培植物のイネ属に由来する植物珪酸体が産出した。

水田跡 (稻作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (機動細胞由来) が試料 1g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われた可能性が高いと判断されている (杉山, 2000)。また、群馬県内の水田跡と推定される畦畔等が伴う遺構を対象とした調査では、上述した含量と同等或いはそれ以上の含量を示す事例が認められる一方、5,000 個/g 未満を示す事例も確認されている状況から、3,000 個/g 程度を判断基準とする場合もある。

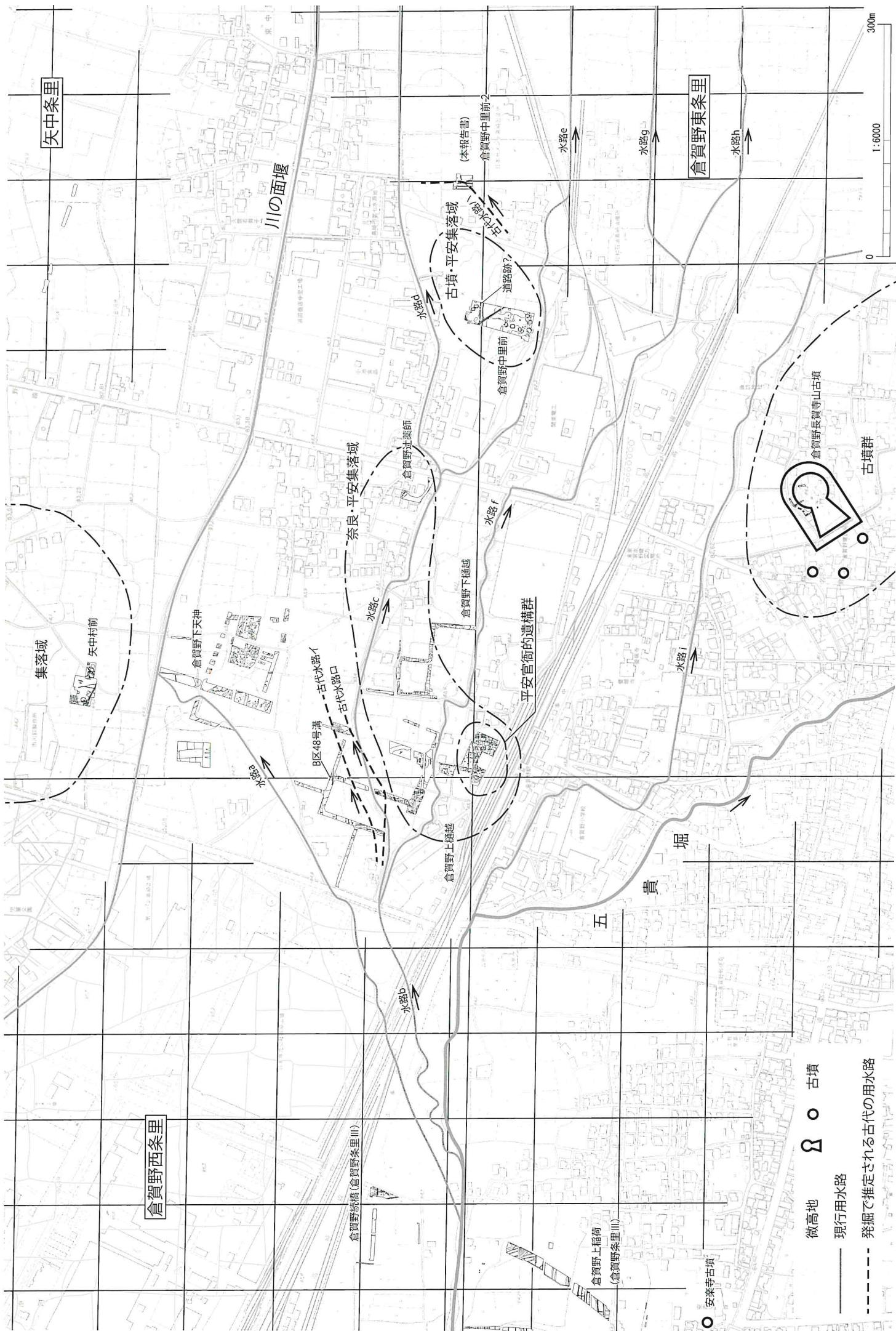
本遺跡におけるイネ属の機動細胞珪酸体含量は、黒色～黒灰色泥層が 1,000 ~ 1,700 個/g、灰色泥層が 400 ~ 500 個/g であり、いずれも上述した判断基準を下回る含量であった。そのため、調査地点において稻作が行われていた可能性を積極的に評価することは難しい。ただし、灰色泥層から黒色～黒灰色泥におけるイネ属の機動細胞珪酸体含量が増加するという層位変化などを考慮すると、As-B 降灰以前に稻作が行われていたものの、耕作期間が短かったことや生産性が低かったなどの要因により含量が低くなった可能性もある。

なお、栽培植物を除く分類群では、ヨシ属、コブナグサ属、メダケ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出された。各試料において植物珪酸体含量が高いヨシ属や 1 地点より産出したコブナグサ属はいずれも湿潤な場所に生育する。これらは水田雑草として生育した、あるいは低地とする領域に生育したイネ科植物に由来すると考えられる。また、メダケ属やススキ属などは周辺の微高地などに生育したイネ科植物などを反映している可能性がある。

<引用文献>

- 新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.
 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
 杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著)
 考古学と自然科学 3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

Fig.15 遺跡周辺の古代景観



今回の調査では、奈良・平安時代～近世に至るまでの水田関係遺構が検出された。これら遺構は基本的には東西～南北方向を指向し、いわゆる条里プラン（金田 2015）と言われる、一町方格の地割に規制されたものと見做すことができる。また、A s-B 直下より下層から、一部条里地割に沿う灌漑用

水路跡と、水田へ取水するための分水遺構が検出された点は、条里水田と用水路の関係を具体的に示すものとして貴重な成果であった。ここでは倉賀野中里前遺跡 2 について、倉賀野東条里（Ⅱ章参照）を構成する水田遺跡とする立場から簡単な検討を加え、本報告の総括としたい。

1. 古代の用水路について

今回、A s-B 水田より下位の第 2 面で確認された S D-7 は、幅が 2 メートル以下、幾度かの掘り直しを経た痕跡と、底面にはそれなりの水流を物語る砂礫の堆積があることから、奈良～平安期の中規模な水路と判断された。この水路は西方から微高地に沿ってきたものが、条里坪線に当たって真北へ屈曲する様相を示し、自然地形の制約を受ける中で条里地割を貫徹しようとした結果と推定される。条里水田が微高地に接する、縁辺部分であるが故に生じた現象と思われる。

高崎台地の古代用水路 今回確認されたような小規模水路の事例は、平安期の水田遺跡では思いのほか確認例が少なく、その性格については俄かに断じ難い。高崎台地の古代用水路としては、矢中条里の大型水路（矢中大溝）があり、条里坪交点を斜めに結ぶラインで計画的に開鑿されている様子からは、条里地割の設定時には既に計画されていたものと考えられる。また近年、下之城沖仲遺跡を中心とした山本ジェームスの成果（山本 2013）によれば、倉賀野西条里では東西坪界線沿いを大型の水路（下之城大溝）が東流しており、これもやはり条里地割の設定と同じ段階と思われる。矢中大溝は現行の長野堰から分流された矢中堰、下之城大溝は長野堰から分流された倉賀野堰に接続する位置関係で、一部で言われるよう長野堰系統の水路の開鑿は古代に遡るとみて間違いない。矢中大溝や下之城大溝が条里地割と一致することを踏まえれば、高崎台地一円に条里水田を施工するに際し、烏川上流から大規模な用水路で水を引き込み、地形の勾配に合わせて放射状に水路網を開鑿したものと考えられる。

類似する水路網は、井野川対岸の前橋台地においても推定されており（関口 2012・永井 2015）、高崎・前橋台地を広大な条里水田へと変貌させるための、言わば最初の作業として同時期に開鑿されたものと推定される。

遺跡周辺の古代用水路 話を戻すと、今回確認された小規模な水路は、上記のような大規模な基幹水路から分水を重ねた流末と考えられる。なお、調査地点の西方に近い倉賀野上

樋越遺跡では、地形に沿う A s-B 以前の中規模溝が 2 条確認されている（大野 2013・Fig.15 古代水路イとロ）。地形上は今回確認された水路（Fig.15 古代水路ハ）とは直接つながらないように思えるが、現行の水路 c・e が仮に古代水路口の末裔と考えると、同じ水路である可能性も残る。なお、古代水路イ・ロは、現行水路 b・f の分岐付近で同じように分岐していた可能性が高い。現行水路 b は五貫堀から分岐されたものであることから、古代水路イ・ロも古代の五貫堀から分水したものと考えられる。ちなみに五貫堀は倉賀野堰から、倉賀野堰は長野堰から分水されている。

ところで遺跡周辺の現行水路のうち水路 b を見ると、五貫堀からの取水後に二股分岐を繰り返し、最終的に d・e・g・h の 4 本の水路となって倉賀野東条里水田の南北坪界を東流している。五貫堀からの取水点が上流の水路 a は川の面堰（中世以降）を経由して倉賀野東条里へ、取水点が下流にある水路 i も同様に倉賀野東条里へ向かうことから、五貫堀自体が倉賀野東条里への送水を主目的に開鑿されたと考えたい。

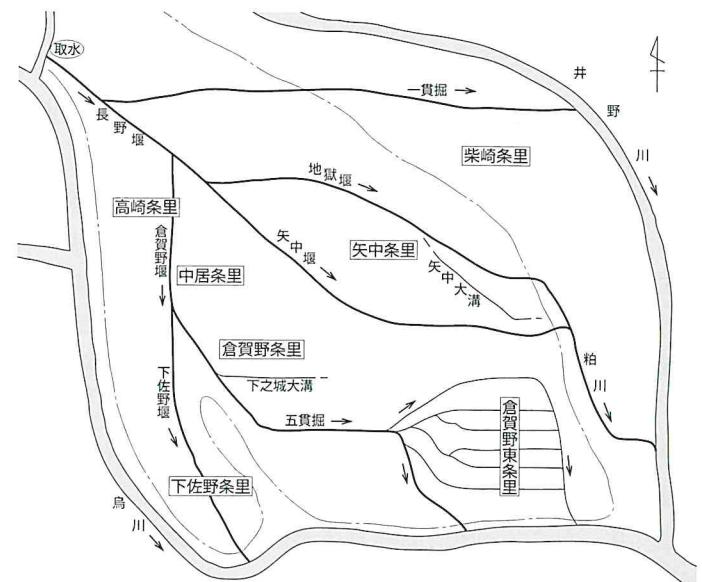


Fig.16 高崎台地水路網模式図

2. 高崎・前橋広域条里と倉賀野東条里

高崎・前橋の台地上に広がる条里型地割の水田は、古くは埼玉大学の三友国五郎によって注目され、同一規格の下に施工された条里であり、かつ関東随一のものであるとの卓見が示されていた（三友 1959）。その後、上越新幹線建設に先立つ高崎市下小鳥遺跡の調査で浅間山火山灰層（As-B・天仁元年 1108 年降下）直下の水田跡が初めて確認され、調査担当の石川庄之助によって一辺 109 m の区画が指摘された（石川 1975）。折しも大規模な土地改良事業等に直面していた高

崎市では、積極的にこうした As-B 直下の水田跡（以下、B 水田）を埋蔵文化財と位置づけ積極的な調査を実施し、事例を増加させていった。これらの調査において、事務局側として一連の調査を指揮した横倉興一は、日高遺跡周辺で確認された B 水田を素材に条里型地割の検討を行い、上野国府・国分寺・東山道駅路に準じて広域施工された可能性を説いた（横倉 1986）。その後、新編高崎市史の編纂に伴い、それまでの調査区を昭和 45 年の都市計画図に落とし込んだ「浅間山 B 軽

石下水田遺跡地図」(『新編高崎市史 資料編2』の付録・高崎市2000)が発表され、条里地割について本格的な検討が可能な状況が整備された。同じ頃、北関東自動車道やそれに伴う大規模開発によって前橋市域での調査も増加し、前橋南部拠点地区遺跡群No.4などを調査した前田和昭によって、高崎市史と同じ手法で作成した地図を下に、条里地割の復元が試みられている(前田2010など)。同様の復元としては、近年では高崎市倉賀野西条里に相当する下之城村前遺跡等の調査成果を用いた大野義人の作業(大野2013)が評価される。

本文での視座は横倉の案をベースに、高崎市史の手法と成果を用いたが、倉賀野周辺は調査事例が少なかったためか市史の水田遺跡地図の圈外となっており、今回新たに作成したものである。作業にあたっては陸軍迅速測図や航空写真による表層条里の情報も多用した。かくして作成したのが、表見返しの明治20年の陸軍迅速測図を下図とした条里全体概念図と、裏見返しの昭和46年調整の高崎市都市計画図の倉賀野周辺を下図とした条里地割復元図の2葉である。

条里全体概念図の説明と解釈 図を見れば明らかのように、高崎・前橋の広域条里は河川由来の微高地によって分離された、複数の条里の集合であることがわかる(Ⅱ章参照)。今回報告した倉賀野中里前遺跡2が含まれる倉賀野東条里も、その一つに相当する。各々の条里水田はほぼ正方位で、地形に関係なく広域に、真北基準で一様に施工されたと考えて良い。概念図には国府・国分僧寺・国分尼寺・新旧の東山道駿路の位置と、古墳時代終末期の有力古墳である総社古墳群を示した。さらに横倉が国府周辺で想定した条里地割を、6町方格で全域に展開した。横倉推定の条里地割は、日高遺跡で確認された南北道路(日高道)を国分寺との位置関係から国府中軸線と考え、それを条里基準線に日高道と東山道駿路の交差部を条里の原点としたものである。

総社と佐野三家 図を仔細に見ると、横倉推定の条里原点から真北へ約4条4町の地点に、7世紀中葉の大型方墳である総社古墳群の愛宕山古墳が位置することに気付く。愛宕山古墳は、宝塔山古墳・蛇穴山古墳と繼起的に築造された大型方墳群の一つで、西方至近にある県内最新の前方後円墳の一つと言われる総社二子山古墳(7世紀初頭?)に次いで築造された、総社古墳群最初の大型方墳とされている。全国的に前方後円墳消滅後の首長墓系列が大型の方墳や円墳となることは良く知られているが、総社古墳群は二子山以降、愛宕山→宝塔山→蛇穴山と3基の大型方墳が造られるという異様な様相で、個々の古墳は同時期の天皇陵と比較しても遜色無いものである(註1)。それ以外にも、北方至近には白鳳期の塑像を多量に出土した山王廃寺があり、この地が国府設置以前から上野国の中枢であったことを教えてくれる。

以上の点から、愛宕山古墳から真南のライン(註2)を基準に国府・国分寺の位置が定められ、駿路(国府ルート)との交点(横倉案)を基準に広域な条里地割が張り巡らされたものと考えたい。その背景には、総社古墳群被葬者に対する、顕彰的側面が多分に考慮される。

また、詳細な位置こそ不確定だが、愛宕山古墳から真南に約21条地点に佐野三家(屯倉)推定地、烏川を越えた南方には、

放光寺(=山王廃寺)の僧である長利の系譜を記した山上碑が、西方には金井沢碑がある点も興味深い。

時系列で整理すると、佐野三家のはるか真北に形成された総社古墳群中の愛宕山古墳を基準に、その南方に国府と国分寺が設置され、さらに南方の低地部に条里水田を広域施工するといった、言わば古代における都市計画の大綱が垣間見える。ここでは問題提起に止め、後日改めて検討したい。

駿路の問題 その位置は興味深い。最も古い段階の矢ノ原・牛堀ルートは条里の只中だが、次時期の下新田ルートは不確定要素が強いとはいえ、条里を避けて前橋台地の縁辺を通る。国府以西の国府ルートは調査事例も多く確実性の高いもので、既に横倉が指摘しているが2条4里を斜めに結ぶラインなので、条里地割の規制下にあるものと判断される。以上の点から駿路と条里の関係を整理すると、矢ノ原・牛堀ルート→条里施工→下新田ルート→国府ルートとなる。条里水田の広域施工が、駿路移動の要因である可能性を指摘したい。

坪界利用の道路 一方で条里施工域内には、坪界を利用した道路が整備されたと推定され、先述の日高道は条里基準線となる坪界上の道となる。高崎市新保八坂遺跡で確認された南北方向の平安期の道路跡(関口修1998)も、水路に平行する坪界上と考えられる。また、Ⅲ章でも指摘したが、本遺跡の第1面南北大畦畔下から確認されたSD-6は、底面に波板状凹凸を伴い道路跡の可能性がある。類例として示した倉賀野上樋越遺跡48号溝(Fig.17参照)についても、同様に道路跡としての性格が想定される。各遺構は全て南北方向で、その間隔は日高道と新保八坂遺跡が半里、日高道と倉賀野上樋越遺跡が1里4町、日高道と本遺跡が2里5町となる。東西方向の明確な道路の調査例は無いが、前橋市川曲地蔵前遺跡3の大溝における遺物出土状態からの類推(永井2015)や、本遺跡西方の倉賀野中里前遺跡では、推定東西坪線部分で2本の平行溝が確認されており、道路側溝の可能性がある。以上少ない根拠ではあるが、高崎・前橋の広域条里では、1里(6町方格)を指向した格子状の道路網が整備されていた可能性が指摘できる。

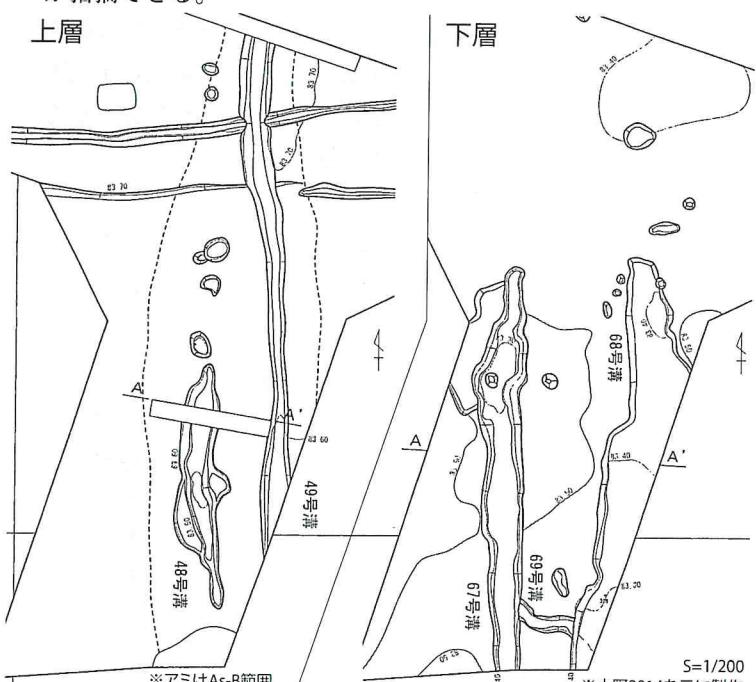


Fig.17 倉賀野上樋越遺跡B区48号溝と下層遺構

条里地割のズレ 裏見返しに示した倉賀野周辺の条里地割復元図作成の際、推定地割をグルーピングできることに気が付いた。つまりズレが生じているのである。具体的には中居・倉賀野西条里（地形からは一連と理解可能）と矢中条里・柴崎条里の一群と、倉賀野東条里のグループで、双方の東西方向の地割、すなわち南北坪界にズレが生じてしまう。南北の地割にはほとんどズレが無いことを勘案すれば、東西地割と南北地割の設定が異なるタイミングであったか、あるいは南北地割のみ広域に設定され、東西地割については個別条里単位で設定したものであったのか、興味を引かれる。試みに倉賀野東条里の東西地割を倉賀野西条里まで延伸すると、ちょうど

五貫堀がそのズレ幅の中に納まることから、いわゆる条里余剰帶を水路が流れているのかも知れない。先に指摘した道路も、余剰帶を利用した可能性を今後は疑うべきだろう。

また、地割は真北基準だが、厳密には正方形でなく、僅か不正な平行四辺形の場合がある点も注意される。これは先に指摘したような、南北・東西地割設定のタイミング差が要因となっている可能性がある。いずれにせよ高崎・前橋の広域条里は、パーフェクトに整った地割ではなかったことは、上記の点から確かである。ここでは現象として指摘するに止め、余剰帶や南北・東西地割の交差角度を勘案した詳細な復元は本書の範囲を超えてしまうため、今後の課題としておきたい。

3. 倉賀野東条里と周辺遺跡群の性格

今回の調査では、条里地割の制約を受けた東西・南北方向の溝・畦畔が主体となったが、一部は地形に沿って条里地割に斜行する溝もあった。それは本遺跡が倉賀野東条里の外縁部にあるためではないかと、1節の冒頭で指摘した。

微高地の様相 では、条里水田ではない微高地はどういうに利用されたのか。調査地点西方は、1節でも指摘したように、倉賀野東条里の灌漑という点において重要なエリアである。当該地は倉賀野駅北口の区画整理事業によって近年調査が進み、情報の蓄積が図られている。ここでは一連の遺跡群として理解する中で、歴史的位置づけを予察しておきたい。

倉賀野上樋越遺跡の官衙的遺構群 倉賀野上樋越遺跡は、平成26年度に高崎市教育委員会によって調査された。現在整理中で報告書は未完であるが、市民対象に開催された現地説明会資料がある。それによれば古代の遺構は、竪穴建物跡12軒、掘立柱建物跡8棟（大半総柱）、区画溝5条、大型の土坑1基がある。出土遺物には、奈良三彩や緑釉陶器・灰釉陶器や碁石？といった高級品が目を引く。

以上の点から、この遺跡が一般集落では無いことは明らかである。注目に値するのは掘立柱建物跡で、不揃いながらも桁行を揃えて東西に並び、それを区画溝が囲む状況は官衙的な雰囲気である。また、北辺区画溝は、倉賀野東条里の東西坪線と、倉賀野中里前遺跡の道路跡？の延長線と推定され、条里地割に規制された遺構群と言える。時期については、掘立柱建物の柱穴埋土から羽釜が出土していることなど（註3）、10世紀以降とみて良いのだろう。

こうした様相から想像される遺跡の性格は、はたして如何なるものなのだろうか。過去の調査・研究事例（田中ほか1997）を参考にすると、①群衙、②群衙の出先機関（正倉別院など）、③有力者の居宅、④庄園の選択肢が挙げられる。現段階では、③・④の複合的な姿をイメージしておきたい。

庄園関連遺跡群としての可能性 倉賀野上樋越遺跡の立地する微高地は、1節で推定したように長野堰から分流した大規模用水路である五貫堀が、倉賀野東条里に向かう複数の水路に分岐する場所に相当する。この点は遺跡の性格を考え上で重要である。また、官衙的遺構群の区画溝が倉賀野東条里の地割に一致する可能性が高い点も、両者の一体性の現れなのだろう。倉賀野東条里表層の不自然なまでに整った方格地割は、As-B被災前に再開発された結果とも感じる。

以上の点から本遺跡周辺は庄園関連遺跡群として評価できる可能性があるが、こうした遺跡は、今のところ高崎・前橋台地では知られていない。今後の調査の進展や、切り口を変えた再検証によって事例の増加が期待される（註4）。

おわりに

今回は小面積な調査・報告であったが、開発事業者のご理解・ご協力によって、調査事例のほとんど無かった倉賀野東条里とその周辺様相を知る上で興味深い成果を得た。いつもながら、受け止めきれないほどの課題を遺跡からもらったが、これについては後日稿を改めることでご容赦願いたい。

最後になるが、本書をまとめるにあたってお世話になった全ての方々に感謝の意を表し、ここに筆を置く。

- (1) 方墳=蘇我氏、円墳=物部氏という理解に立てば、総社古墳群の3基の大型方墳は蘇我氏系の被葬者が想定される。なお、方墳以前の総社二子山古墳は頭椎大刀を出土し、物部系の可能性がある点は注意される。
- (2) 3基の方墳のうち、愛宕山・宝塔山は主軸が東に振れるが、最新段階の蛇金山はほぼ真北となる。逆に条里地割に規制されている可能性がある。
- (3) 倉賀野上樋越遺跡については、調査担当の大野義人氏の御教示を得た。正式報告前なので、ここでの見解は後日訂正される可能性がある。
- (4) 最も似た遺跡として埼玉県上里町中堀遺跡がある（田中ほか1997）が、群馬県内での例は今のところ無い。可能性を持つ遺跡として、前橋市房丸桜町遺跡（中村岳彦ほか2010）や玉村町一万田遺跡（笠原ほか2003）がある。房丸桜町遺跡は条里水田の只中から10世紀代の掘立柱建物・井戸・区画溝・大型土坑が確認され、多数の灰釉陶器と共に県内では稀有な白磁が出土しているが、狹小な調査区で不明な点も多く今後の調査が俟たれる。一万田遺跡は条里地割に一致する区画内から掘立柱建物群が確認されている、また、高崎市新保遺跡についても、候補の一つとなり得るだろう。

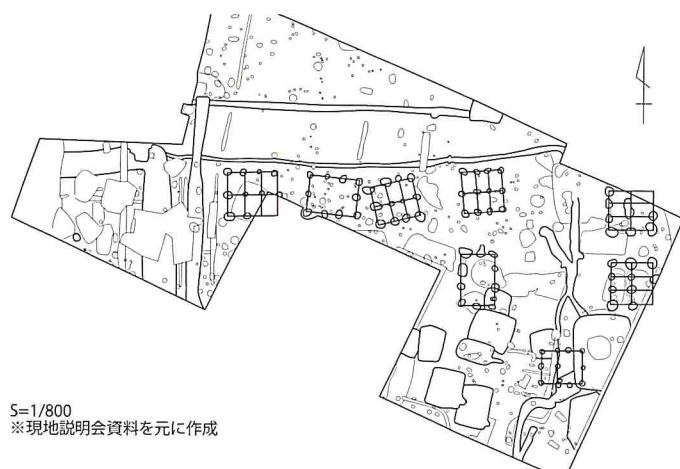


Fig.18 (参考) 倉賀野上樋越遺跡

参考文献

- 阿久澤智和ほか 2015『推定上野国府』平成 25 年度調査報告 前橋市教育委員会
有山径世ほか 2015『倉賀野長賀寺山古墳』350 集 高崎市教育委員会・(有)毛野
考古学研究所
奥富雅之ほか 1996『倉賀野中里前遺跡』調査会 45 集 高崎市遺跡調査会
大野義人 2013『下之城村前遺跡 7』313 集 高崎市教育委員会
大野義人 2014『倉賀野上樋越遺跡』326 集 高崎市教育委員会
笠原仁史ほか 2003『一万田遺跡』玉村町教育委員会ほか
金田章裕 2015『IV条里 1 総論』『古代の都市と条理』条里制・古代都市研究会編
吉川弘文館
小林朋恵 2010『倉賀野西上正六遺跡』268 集 高崎市教育委員会
関口修 2000『新保八坂遺跡』『新編高崎市史』資料編2 原始古代II 高崎市
関口功一 2012『上毛野の古代農業景観』岩田書院
関口功一 2013『古代上毛野をめぐる人びと』岩田書院
高崎市市史編纂委員会 2000『新編高崎市史』資料編2 原始古代II 高崎市
高崎市教育委員会 2014『倉賀野上樋越遺跡発掘調査現地説明会』資料
田中広明ほか 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中村岳彦 2010『房丸桜町遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団
永井智教 2015『川曲地蔵前遺跡No.3』前橋市教育委員会・山下工業㈱ほか
原島礼二 1961「大和王権と地方豪族—関東地方の屯倉を例として」『日本史研究』
54 日本史研究会
前田和啓 2010『南部拠点地区遺跡群No.4』前橋市教育委員会
右島和夫 2010『利根川中流域における6世紀後半の前方後円墳』『阿弥陀古墳』
伊勢崎市教育委員会
三友国五郎 1959『関東地方の条里』『埼玉大学紀要 社会科学編(歴史学・地理学)』
第8巻(『関東条里的研究』東京堂出版 2015に再録)
山本ジェームズ 2013『下之城仲沖遺跡 3』307 高崎市教育委員会
横倉興一 1986『上野国府周辺における条里構造の問題点』『条里制研究』第2号 条里制研究会
吉田昌俊ほか 2006『倉賀野駅北 I・II・III・IV・V・VI 遺跡』202 集 高崎市教育委員会
若狭徹 1995『上野西部における5世紀後半の首長墓系列』『群馬考古学手帳』5 群馬土器観会

報告書抄録

ふりがな	くらがのなかざとまえいせき 2						
書名	倉賀野中里前遺跡 2						
副書名	工場建設に伴う条里水田遺跡の発掘調査						
卷次							
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書 第 357 集						
編著者名	永井智教						
編集機関	山下工業株式会社 〒 371-0244 前橋市鼻毛石町 207-8						
発行機関	高崎市教育委員会 文化財保護課 〒 370-8501 高崎市高松町 35-1						
発行年月日	2015年 11月 13日						
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積
		市町村	遺跡番号				
倉賀野中里前遺跡 2	群馬県高崎市倉賀野町 字中里前 4728-1	102020	646 (矢中 40)	36° 18' 04"	139° 03' 27"	2015.8.06 ~ 2015.8.24	624.6m ²
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
倉賀野中里前遺跡 2	生産跡	奈良時代～ 平安時代前半	溝跡 8 池状遺構 1	土師器 須恵器	奈良・平安時代の水田に伴う灌漑用の水路を検出した。一部は地形、一部は条里に規制されたようで、高崎台地における古代用水路網の末端と考えられた。		
	生産跡	平安時代末	水田跡? 溝跡 1 大畦畔 1	土師器	As-B テフラ(浅間山・1108 年降下)直下の条里水田。大畦畔上の溝は、硬砂で満たされており、畔の基礎か、道路状遺構の下部構造の可能性が考えられた。		
	生産跡	中・近世	溝跡 5	陶磁器	条里水田の耕作痕由来の近世溝 4 条と、地形に沿った中世の溝 1 条。		

高崎市文化財調査報告書第 357 集

倉賀野中里前遺跡 2

—工場建設に伴う条里水田遺跡の発掘調査—

2015年 11月 13日 印刷・発行

編集 山下工業株式会社
発行 高崎市教育委員会
印刷 朝日印刷工業株式会社